

はその心霊をして歡喜無限なるものとならしめん。視よ此の愛の徴候は左の如し、人の面は火の如く且喜ばしきものとなるべく其の体は奮熱するなり、怖るべき死を見て彼は喜びとなすべく彼の心の直覺は其の天上の事を思ふも妨ぐる如何なる遮斷をも決してゆるさざるべし、何を爲すといへどもそを全く感せざるべし、けだし彼れの心は直覺よりて高飛し彼れの思は常々宛ら他の某と談話するが如くなればなり、昔し使徒及び致命者等は此の靈神的の希望をもて希望したりき。

二百六十一、もし謙遜の都入る迄は汝自ら己れに於て諸欲の擾乱より休せりと認むる時は自ら己れに信用するなかれ、敵は汝も或る伏兵を設けん、故に此の安心の後にも大なる動搖と大なる擾乱とを待つべし。

二百六十二、苦行は聖なるもの母なり、汝が貞潔の善徳は涙と禁食と寂靜なる沈黙とをもてこれを平すべし、神の爲に小なる憂患をかゝるは憂患なしに成就したる大事に勝されり、もし身体がハリストスの爲に苦をうけ

ずんば智識はイエスと共々頌揚せられざらん、身体の榮譽は貞潔なり、智識の榮譽は神に就ての眞實なる思辨なり、十字架に上るの方法二あり一は身体に釘うつなり一は直覺に入るなり、初者は欲より解脱したるの結果として後者は心神の行の有能なるの結果なり、もし身体が智識に服従せずんば智識は服従せざらん、神に智識の綱は即ち身体に釘うつなり。

二百六十三、凡そ善なる者の基礎根本は左の二の方法あり、即ち心を一に收束すると常々禁食するとなり、是れ即ち極て賢く且善く智として口腹を節すると一處に出でずして留まると神を思ふをもて不斷の業事とするをもて己れの爲めに立て、規則とするとなり、五官の服従は此より生ずべく心の清醒もこれより生ずべく身体に起る所の猛烈なる欲の鎮靜もこれより生ずべく思の清明なる發動もこれより生ずべく徳業も致々たるともこれより生ずべく死の記憶もこれより生ずべく眞實なる人の自由も此れより生ずべし……

二百六十四、されども若し誰か此の二つの方法を輕んせば悉くの徳行の根本は動搖せん。けだし此れより離れ且遠ざかる者はこれと反對なる二の邪惡も赴かん。即ち身の漂泊と耻づべき嗜甘とも赴くべくして心も於て悉くの欲も所を與ふるなり。

二百六十五、魔鬼は連綿熱切なる祈禱の廢されんやうも先づこれを成すも盡力し而して其後祈禱と身体上も行はるゝ規則との一定なる時間を輕んせしめんを勸む。夫れかくの如くもして最初も思念は食のいかばかりか僅小なるものと何か最微もして論ずるも足らざるものとを時も先ちて嘗むるの弱きも従はんとす。されども其後最早其他の事も思念も於て互も蜂起するなり。

二百六十六、敵は日夜我等の目前も立ちて我等が五官の開かれし入口もよりこれも入らんとを熟視す。而して我等何か一事も於て怠慢をゆるす時は此の狡猾無耻なる犬は我等も其箭を放たんとす。

二百六十七、曾て智者あり弱きもよりて暫時搖動しけるもそれを覺知して己を以前の位置も導き直ちも居坐したりき。他者これを一見して彼を晒へり。然れども彼は答ていへらく『余此を畏れしもあらず。されども余は怠慢を畏る。何となれば小なる怠慢はまばら大なる危きも導びけばなり』と。是れ智人なり。彼は小なる事も於ても且最微なる事も於ても何も論なく常も慍々たるを致す。彼は大なる安靜を己れも準備するなり。

二百六十八、怯懦なる人は己れ二病も苦む。即ち此世を愛すると小信とも苦むを報告するなり。されども此世を輕んずる者は己れ全心もて神を信ずると來世を待つとを證明するなり。

二百六十九、人もし先きも己の力も應じて神の旨を行はずんば神を望むの希望を得るあたはざらん。けだし神を希望すると心の勇氣とは良心の證明もより生すべくしてたゞ我等が智覺の眞實なる證明も由り我等は神を望むを得るなり。されど智覺の證明は良心が人を責めて其己の力も應じ必

ず爲さるべからざる所の事と怠れりとなすやうの事の少くもあらざる
 ありもし我心の吾を非責するわらずんば神の前、毅然たるを得べし
 「イオアン」一書三の廿二、毅然たるとは徳行と善なる良心とに於て上進した
 るの結果なり。

二百七十、沈黙と寂靜との高上なる原因は人が己の内部に或る神與の談
 話を有して其の智識がそれより引去らるゝ時とこれあり。

二百七十一、智識は外形上の行なくしても善を成すを得べし、然れども
 善行を成すの便利と逢ふ時と己が行爲の勞をもて神を愛するを證せざら
 んとは神の人と堪へざるべし。

二百七十二、人が己の前罪を記憶して己を罰する時は神は彼を安んせし
 めんとを慮るなり、神の途より離れたるが爲に人の自ら己に罰を加へて悔
 改の號とするは神の喜ぶ所なり、されば人がいよく己の靈魂を責むる程
 は人の榮譽は神にて増殖せらるゝなり。

二百七十三、徳行は彼此相承くるなり、これ序と循ひて上進し且此の上進
 に於て己の爲に減輕を見るを得べからんが爲めなり、けだしもし誘惑を喜
 んで擔過すべきを固く信ずるとなく己をこれに準備するとなくんば誰も
 眞實の無欲を得る能はざるべし、又憂患の爲めは身体の安さより超越する所
 のものをうくるを得べしと確信したる者の外は何人も誘惑を擔過すると
 能はざらん。

二百七十四、實驗を求むとはたゞ人、何の物もか未だ接するわらず其物に
 就ての認識を未だ己れに得ずしてこれを觀察するをのみいふとわらず
 して、久しく其物と交りし後實驗によりて其の益と害とを明し觸知するを
 いふなり、けだし物は表面上有害なるが如く見えて内部には全く利益を
 充たされ然らざれば又これと相反するを云はくなればなり。

二百七十五、誘惑に準じて賜も神にて定めらる、これ神に造られたる者の
 及ぶ能はざる睿智と出づるなり、もし靈魂が最初に大事を己の量に過ぎて

奥密よりくるとなく又先づ靈魂の爲に快喜なる恩寵の神をうくるとなく
んば誘惑は來らざらん。かくの如くすべての人々と行爲するは善なる神の
意に適するなり。

二百七十六、神に依る所の身体上の生活は外形上の行爲なり、さて道德上
の實驗より肉身を淨めんが爲に顯然たる行爲をもて行はれこれをもて
人が肉身上の汚穢より淨めらるゝ所のものは外形上の行爲と名づけらる
ゝなり。靈智上の生活とは心の行爲にして在らざる所なく見ざる所なき神
の感悦に入らんとを念ずるの意思をもて連綿として繼續するものなり、又
心の間斷なき祈禱と己を隠晦なる欲より守るとなり、これ其の欲に屬する
ものをして秘密なる靈神上の範圍に於て絶て偶發せざらしめむが爲めな
り。是れ皆心の行爲なり、これ即ち靈智上の生活と名づけらるゝなり。

二百七十七、靈神上の生活とは神に驚奇するなり、即ち復活の後にある不
死なる生活を預め始むるなり。人の天性は彼處に在りては常に神に驚嘆し

てやまざるべく諸の造物には何の思も全く有せざらん、けだしもし何か神
に類似する者のありしならば心はそれと暫く動かさるゝともあらん、され
ども造物の悉くの美は將來維新の時、於ても神の美よりいよゝ下るな
らばいかんぞ智識は其觀望をもて神の美より離れ遠ざかるべけんや。

二百七十八、肉身の清淨とは肉身上の汚穢に觸れざるをいひ、靈魂の清淨
とは心に生ずる所の隠れたる欲より解脱を得るをいふ。されば心の清淨は
奥密の啓示によりて成るべし。神は自ら蔽はれざるの智識をもて神を洞察
するとを賜ふなり。

二百七十九、信仰は奥義の門なり。身体の目は五官を樂ましむるの物を見
るが如く信仰は其の靈妙なる目をもて奥密なる所のものを看るなり。我等
は二の靈妙なる目あり、一の目を以ては天性に隠れたる神の榮の奥秘を
見るべく又他の目を以ては至聖なる神性の榮を洞看するなり。

二百八十、恩寵に恩寵を加ふるものとして洗禮の後人々痛悔を與へら

る、何となれば痛悔は神よりて生まるゝ第二の更生なればなり。痛悔は心を専らして尋ねる者の爲め、開かれたる矜恤の門なり、されば此の門よりて神の矜恤に入らん、此の入口を外しては矜恤を發見せざるべし。痛悔は第二の恩寵として信仰と畏れとよりて心を生せらるゝなり、されば畏れは靈神的の樂園に達する迄、我等を統御する父の權杖たるなり。二百八十一、樂園はあらゆる福樂をもて樂ましむる神の愛なり、此の園樹の果をアダムは禁せられしは魔鬼の陰謀の故なり、生命の樹は即ち神の愛としてアダムは此より落ちたり、故に其時より喜びは彼を迎へずして彼は荆棘の地に於て勞働辛苦したりき、神の愛を奪はれたる者はたとひ正しく歩むといへども失墜の後、初造者に命せられたるが如く己の勞働よりて滴汗の麵包を食はん、愛を得るに至る迄は我等が行爲は荆棘の地に於てすべし、ゆゑに縦ひ我等が播くは義を播くといへども我等は荆棘の中を播き且刈りて時々これが爲に傷つけらるべく己を義とするが爲め、何の爲す

所あらんも面を汗して生活すべし、されども愛を見着くる時は天に屬するの麵包にて養はるべく、勞働と辛苦となうして克く強健なるを得ん。二百八十二、舟なくして海を渡る能はざるが如く何人も畏れなくして愛に達すると能はず、我等と心の樂園との間にあるの臭海はたゞ其の畏れの消手ある痛悔の舟にて過渡るを得るなり、痛悔は舟として畏れは其の舵人なり、而して愛は即ち神の漣なり、畏れは我等を痛悔の舟に導き入れ生活の臭海を渡りて愛なる神の漣に嚮導するなり、されば愛に達する時は我等は最早神に達したるなり、即ち我等が旅行は成就して我等は父と子と聖神のある所なる彼の世界の島に到着せしなり。二百八十三、信仰は先だつの認識あり、又信仰をもて生せらるゝの認識あり、信仰は先だつの認識は天然の認識として信仰よりて生せらるゝものは靈神的〔恩寵的〕認識なり、天然の認識を神は我等の聰明なる天性に賦し給へり、されば我等はこれをもて天性自然に學問を俟たずして善と惡とを識

別するなり。此の認識は亦神に至るの途なり。天然の認識即ち神が我等の天性に賦されたる善と悪とを別つの心は一切を有在ならしめたる神を信すべきとを自ら我等を勸誘するなり。されども信仰は我等を畏を生せしめ而して畏れは又我等を痛悔と行爲誠命を循ふの行爲とを勸勵するなり。且此の行爲よりて靈神上の認識も生ぜらるゝなり。

二百八十四、神の仁慈に依り人々賦入して靈魂を生命に導く所の第一の思念は此の天性の近ると關して心中に潜伏する所の思なり。此の思念は隨ひて自然に世を輕んずるの念を生ずべく且此をもて人を生命に導く所のすべて良善なる進行は人々於て始まるなり。サタナは此の思念を最憎惡し人々於てこれを滅絶せしめんが爲め全力を盡して攻撃す。

二百八十五、神と体合するをなして神の審判を常に掛念する所の其者はこれ即ち恩寵の殿なり。我等が神を念ふの記憶を己れに固むるはこれ即ち我等を神を定住せしむるなり。

二百八十六、心の所爲は外感の爲め鎖鎖となるべし。さればもし誰か先諸父の例に倣ひて細心とこれをつとむるわらは次の三の現象によりて此事は疑なかるべし。即ち彼は身体の利益に束縛せられざるべく腹を喜ばすを好まざるべく、及び激怒し易きとの彼より全く遠ざかる是なり。

聖なる大老ワルソノファイ及イオアンの教訓

祈禱と清醒の事

一、己れの前より常より神を有せんが爲めは徹醒して己れに注意すべし。願くは預言者の言は汝の上にも成るあらん、曰く「我れ常より主を我が前よりたりけだし我が右よりあり我れ動かざらん」(聖詠十五の八)。

二、熱心と冷淡との事より關して言はんは主が自ら己を名づけて心腹を煖め且焚く(聖詠廿五の二)所の火復傳律令四の廿四エウレイ十二の廿九といはれしは人々の知る所なり。故より冷淡を覺ゆるあらば神を呼ばん、さらば神は來りてたゞ其の神より對するのみならず近者にも對する完全の愛をもて我等の心を煖めん、さらば善の嫉妬者の冷淡は神の温煖の面より逐はれん。聖書にいふあり「我れ切より主を恃むは主は我れに傾きて我が祈りを聽き給へり」と、これ何をいふか曰く「我を畏るべき罪より又泥澤より引出せり」(聖

詠卅九の二、三)心の無感覺なるとも亦此の罪より屬すべし。

三、凡て寧靜の先たざる思念、何をか爲さんとするの意志は神より生じ來るよわらずして疑なく左方よりするなり。我等が主は安靜と共に來らん、されどもすべて敵より屬する者は騒擾と叛乱と共に起るなり。故より至愛者より神を畏るゝの畏れを己が目前よりあらはしすべて汝より屬する所の事を爲して感謝を主に獻るべし(成就したる後)。

四、願くは主宰ハリストスの宣へる靈火は汝の心より永く熾ならんとを、曰く「我來りて火を地より投ず」(ルカ十二の四十九)願くは主の平安は汝の心より定住せん(コロソ三の十五)願くは怒りと憤激とより即ち此猛烈の情より清められん。願くは主は汝をハリストスの被育者とならしめ又溫柔の羔とならしめんが爲めは汝の心を温良と謙遜とより定住せしめ賜はん(イレミヤ十一の十九)願くは汝の目は神を見るを心清き者の目の如くならん(馬太五の八)。

五、我れより規則を受けんと欲するなかれ。思慮を持すると風より從て其の

舟を方向せしむる舵人の如くなるべし。すべてを聰明に行ふべし。さらばこれ汝を我等が主イエスキリストに於るの永生に導ひかん。

六、祈禱するに神が聴くを遂引するあるはこれ我等の益の爲め。かく爲して我等は忍耐を教へんが爲めなり。故に我等は祈禱したれを聴かれずといひて憂悶すべからず。神は人益ある所のものを知るなり。

七、慎んで爾の耳を俄に驚かすを免れん。曰く「視よや新郎至れり出で、彼れを迎ふべし」と。馬太廿五の六十二「門閉されたりといへるを記憶すべし。急げよ。願くは愚なる童女と共に外に棄てらるるを免れん。己の思ひて此の虚世より他の世に轉せよ。地に属するものを棄て、天に属するものを尋ねよ。朽つべきものをすて、朽ちざるものを得よ。思ひて暫時なるものを逃れて永遠なるものに近づけよ。全く死すべし。願くは全く我等が主ハリストイエスキリストによりて消光さん。

八、汝を試さんが爲め。汝に向て起る所の誘惑の一をも畏るなかれ。け

だし神は汝を交さるべければなり。何等の事の汝に追及くあるも汝は其の理由を捜す。苦むなかれ。イエスキリストの名を呼んでいふべし。イエスキリストよ我れを助けよと。さらば彼は汝に聴きていはん「凡そ彼を呼ぶ者よ遣し」。聖詠百四十四の十八「自から小膽に沈むなかれ。熱心に前進すべし。さらば我等が主ハリストイエスキリストによりて願ふ所のものを得ん。

九、我等が救世主の最明白なる教は左の如し。曰く「願くは汝の旨は成らん」。馬太六の十「誠實に此の祈禱を唱ふる者は自分一個の旨をすて、すべてを神の旨に托ぬ。

十、聖書に「狂妄をして汝の口より出てしむるなかれ」と。サムエル前二の三「然るに汝は敢て神の前より口を開き。諸欲は汝に弱れりといひ以て。あらゆる欲の我れに伏在すると貯藏所に伏在するが如し。といふは易ふ。これが爲め。汝はすてられ。すべて汝の憫然はあらはれぬ。されば汝は弱らずして預め己を儆醒すべし。八の異民を滅さんが爲めなり。

十一、何よでも時ならずして爲すは我意を遂ぐるなり、これ高慢より生ず。」
 十二、汝はハリストスと共に十字架より釘まで釘つけられ、鎗まで貫かるべし、忍耐してすべての爲め感謝せよ、言ふあり、凡の事感謝すべし、
 十三、前五の十八、されば窮乏は於ても疾病は於ても安慰は於ても感謝すべきと明なり、間斷なく神を呼ぶべし、さらば神は汝と共に居りて汝の名の爲めは汝は力を興へん。

十三、父と子と聖神の名より十字架の記號を汝の心は擾されずして置くべく、且此の記號が我等は敵の首を蹂躪するは助くるを信じて汝の心を固むべし。

十四、もしすべては於て平安なる者とならんと欲せばもろく、の人と對する關係は於て死すべし、さらば平安なるを得ん。

十五、我等は旅人たれば旅人とならん、或事の爲は自分を算へざるべし、さらば誰も我等は何の重みも付けざらん時は平安なるべし、もろく、の人の

爲めは死せんとは尤盡力せよ、さらば救はれん、己の思念はつげていふべし、我れ死して墓ありと。

十六、兇惡なる思念の爲めは擾れをうけざらん、此の擾れが起りて我等の近者よも其の擾れの及ばんが爲めなり、これ魔鬼の働きよりて生ずるは外ならざるなり。

十七、思念が汝は勤めて神の旨は循ひ何をか爲さしむるあらん、汝は其事は於て喜びを見ると同時はそれと反對の憂を見る時は知るべし、此の思念は神より生じて己を忍耐せしむるものなるを、使徒の言は、いへらく、我が体を制してこれ服はしむ、そは他の人を教へて自ら棄てられんを恐るればなり、
 コリント前九の廿七、ゆゑは汝は神の旨を行ふべし、さりながら魔鬼より生ずる所の思念はまづ第一は亂れと哀みとを充たす、されども彼は隱密に且巧みは誘ふて己の跡は従はしめむ、けだし敵は羊衣を被むればなり、即外面は正しく見ゆる所の思念を勤めて内は實は殘狼なればなり、馬太七の

十五、即ち横直なる者の心を誘ひ、且奪ふ（ローマ十六の十八）善なるが如く
 見え、其質は悪害なるものを以てすればなり。聖書（蛇を謂ひて）智なる
 者と爲す故、其の首（かしら）は常々注目すべし、其の汝（あなた）は於て穴を見付ざらんが爲
 め及び其の穴は住みて荒廢せしめざらんが爲めなり。されば汝は何事をか
 聞き又は思ひ又は見る（あきら）あらんやたとひ多からざるも汝の心の擾さるゝわ
 らば、こは魔鬼は属するものと知るべし。さらばもし汝は靈神上の法を未だ
 得ずんば、而して思念を自ら熟思する能はずんば、師の前は謙遜すべし、彼れ
 は思念を打明すべし、願くは矜恤をもて汝を罰せん、聖詠百四十の五、されば
 外面は汝は善なるが如く、見ゆるといへども、教訓をうけずしては何も行
 ふあるべからず、シラフ卅二の二、けだし魔鬼の光は終に暗に變ずればなり、
 十八、眞實の途は我等が經過して最早背後に棄てたる者をして翻りて我
 等を誘はしめざるやうにす、然らずんば我等が出でし其處に非難
 をうくべきもの多くあらはれて我等が勞は徒然に歸せん、我意を己の背後

に棄つべし、且生涯の間汝は謙遜なるべし、さらば救はれん。

十九、憂の爲めは恍惚となれる汝の心の目を醒ますべし、願くは死の睡り
 に寐ねざらん、聖詠百十八の廿八、十二の四、儆醒すべし、願くは汝の智識は其
 の汝の善地は荆棘を成長せしめざらんが爲め及び種子を壓潰（おぼろ）さざらんが
 爲め、これをいかん看守すべきを悟らん、戒慎せよ、けだし、不敬虔者は四方
 に環ぐればなり、聖詠十一の九。

二十、我等が父よ、すべての祈禱は於てと呼ぶとは完全なる者よ、又罪人
 にも命せられしなり、完全なる者よは彼等子たるを認識して神より離れ反
 かざるを努めんが爲めなり、又罪人よは其のまばらしく凌辱したる所の者を
 慚愧の心をもて父と名づけて己を罪し悔改を生せしめんが爲めなり。

二十一、もし汝は使徒の言ふ如く間斷なく祈禱するあらば、ソルン前五の
 十八祈禱に立つよ、長きを要せざるなり、蓋し汝の心は全日祈禱に在ればな
 り、手工に坐する時は詩を口づから讀み又は言ひ而して各詩の終りに坐し

て祈禱すべし。例へば『神よ我等誼はれし者を矜めよ』といふ是なり。されども
し思念が汝を安んせしめずんばこれ又加へていふべし。曰く『神よ汝も我が
憂を見て我を助け給へ』と。然れども時々祈禱は立ち適當の言をもて膝を屈
むべし。暗記して詩を歌ひ或はこれを誦し近きも誰も居るなくんば無譜よ
てこれを唱ふべし。

二十二、夜は關しては日の没るより算へて黄昏二時間祈禱すべし而して
讚榮を終へて六時間眠むるべし。其後起きて儆醒し餘の四時間は不眠なる
べし。

二十三、汚穢を洗はんを願ふて涙よてこれを洗ふべし。蓋し涙はすべし。返の
汚穢を洗ひればなり。汝の喉の言歌ごたまざる間はイエスを呼ぶべし。師や我
を救ひ給へ我儕亡びん。ルカ八の廿四。己の心を灰燼より清むべく且主が來
りて地を投するの火を熾すべし。彼は此のすべてを滅し汝の金を清きも
のとなさん。清醒は我等は多く要用なり。

二十五、世の人々が獲物を尋ねて猛獸も賊の攻撃も海の危険も死も願み
ずしてたゞ其の望む所を得んとするやたとひ果してこれを得るや否を知
らずといへども其心を弱めざらんとは驚嘆すべし。されど我等誼はれ且怠
惰なるものは蛇蝎を踏み敵の全力を踏潰すの權をうけ又是れ我れなり。恐
るゝいなかれ。イオアン六の廿との言をきゝ而して其の戦ふや自分の力を以
てするよあらずして我等を堅むる神の力を以てするを疑なく知るも弱わ
りて且煩悶す。何故此の如くなるか。これ我等が肉身は神を畏るゝの畏れ。聖
詠百十八の百廿は釘うたれざると我が呻吟の聲よ。より我が餅を食ふとを
永く忘れざりしよ。よるなり。聖詠百〇一の五六。故は我等は此れより彼れよ
轉じて主が來りて地を投するの火を全く受けざりしなり。ルカ十二の四十
九。此の火は我等が心の田よある所の荆棘を焼き且滅すべし。己を弱らすと
怠慢なると身体を愛するとは我等をして興起するあらしめざるなり。
二十六、完全なる祈禱は息を散せしめず悉くの思念と感覺とを收束して

神と談話するあり。人はことごとく人の爲め、世の爲め及ひすべて世ある所の者の爲め、死する時はかくの如き性情に入らん。さればかくの如き人は祈禱に於てたい願くは汝の旨は我れならんといひ又神の前立ちて神と談話するを心より有するの外神は何も言ふを要せざるなり。

二十七、汝が見し所、さし所將た爲し、所の事を記憶するはた、其の謙遜と苦行と涙とを合し及び我意を絶つと合するの祈禱を滅すのみ此外何も滅す所あらず。

二十八、心を守るとは戦を煽動する所の思念を脱して清醒潔淨なる智識を有するの謂なり。最初智識は其の思念を輕んず、されども其後最早敵が油断を見知る時は智識は戦を入るゝと盡力するなり。もし其思念の汝は敵たるか將た友たるかを識らんと欲せば祈禱を作して彼れを問ふべし。汝は我等は属するか將た敵よりするか』と『イイヌスナウ』五の十三さらば彼は汝は眞實をつげん、けだし叛逆は油断より生ずるなり。抗拒すべからず、思念

よて何となれば敵は此を欲し、而して抗拒を見て攻撃をやめざればなり。然るに敵は對しては主の前は俯伏し己が病症をあらはして祈禱すべし。さらば主は彼等を逐ふのみならず彼等を全く廢滅せん。

二十九、精舎は止まるとは是れ即ち自分の罪を記憶してこれが爲め悲み且嘆き己を徹醒して智識の捕はれざるを致すなり。而してもし捕はるゝわらば速にこれを本來の位置に再び導くゝ盡力するなり。

三十、人もし己を預め責むるゝ急がすんば智識は猛獸は攫去らるゝなり。〔恰も猛獸は咬まるゝ野獸の如くなるへし〕かくの如きの智識は牙咬爪烈、心中の猛獸の痕を己れに有す、故に治療即ち悔改を必要を有するなり。

三十一、もし身体の汝は叛逆するわらば急ぎ走りてイイヌスに祈禱すべし、さらば平安なるを得ん。

三十二、他を罪するは汝は己を義とする心の未だ死せざるゝよりて生ずるなり、己を罪せよ、さらば他を罪するを息まん。

三十三、畏懼は失望の姉妹なり、彼は心を弱らして神より離れしむ。我等はこれより逃れて我等も寝ぬる所のイエスを呼醒し叫んでいはん、夫子我を救へ我儕亡ひん」と馬太八の廿五、さらば彼れ起ちて風も禁じて風静ならん且我等もつげて曰はん、我れなり、恐るゝいなかれ、イオアン六の廿

三十四、イエスは何の處も遠く去り汝をして彼れも近づきて其の來り助くるを祈る能はざらしむるか、否汝の耳は汝の口よて左の如く唱ふをさかざるか曰く、主は凡て眞實をもて彼を呼ぶ者も遣し彼を畏るゝ者の望を行ひ彼等が祈禱を聆きて彼等を救ふ、聖詠百四十四の十九彼れも貼くべし、さらば彼は汝を内部の主人よりも又外部の僕よりも救ひ給はん、

三十五、萬人救を得て眞理を明し知るよ入らん」とを欲する、(テイモフ、イ前二の四者の仁慈を祈るべし、主及び天地の主宰が其の來りて地も投ずるルカ十二の四十九の靈火をもて起す所の靈神上の不眠を汝も賜はらんが爲めなり、神は此の恩寵を凡て勞苦と熱心をもて願ふ所の者も賜ふなり、故も

恩寵は來りて心の目を照らし、衰弱と不注意の睡眠を驅り、怠慢の地も於て鏽を生じたる武器を拂拭はん、

三十六、イエスは誰をも退くるなし、彼れは十一時も雇工を其の葡萄園も雇ひ給へり、彼れも貼きて多少の働を作すべし、衆とひとしく賞をうけんが爲めなり、神は汝も智識を賜へり、これ其のわたへられし者をしてこれを天上も献せしめ、至上もあるものを求め天もあるものを念はしめ、コロス三の一、二神の自から居る所の處も向はしめんが爲めなり、たゞ此の方法をもて各、舊人より脱するを得べし、イエスは使徒等もいへらく、汝等は地の鹽なり」と馬太五の十三、腐敗も搥してこれを乾かし、己れも於て、又蟲即ち惡念を滅して自から己れの爲めも搥となるべし、神及び我等が救世主は我等の救はれんを欲す、されど我等は間斷なく呼んで主よ我を救ひ給へといふべし、さらば救はん、

三十七、尋ぬべき所の方略は是れ即ち變化して舊人より潔めらるゝと靈

と形どの成聖を得るとあり。

三十八、もし誘はれて誰れとなりとも行又は言よて罪を犯すあらば其者
よ往き赦を願ふて叩拜すべし。さらば神は此を見て汝を其敵より防ぎ衛ら
ん。

三十九、憂鬱は何の時よ息むべきか。―我等の主が來りて其の名よより前
門の側よ坐する所の聲者の耳よ起ちて行け』てふ喜ばしき聲のきこゆる時
よやまん其時よ彼は起ち且踊りて神を讚美しつゝ』行傳三の六八聖所よ入
らん其時よ憂鬱と怠惰の夢はやまん其時よ憂鬱と怠惰の催眠は臉より飛
散らん其時よ五人の智女は己が燈を點し新郎と共に擾さるゝなく聖なる
室よ於て祝賀し同音よ歌ふていはん』視よ主のいかよ善なるを視よ』聖詠六
十三の九』其時よ戦はやみ汚穢も動搖もやみて聖三者の聖なる平安は定
住すべく寶物は封印せられて掠奪の近づく能はざるものとならん。

四十、神がイオフの爲めよ證したる時惡魔はイオフよ向つて憤怨したり

し如く又少者の清めらるべき時の近づきしを預察して彼を拘攣せし如く
〔馬可九の廿〕かくの如く誰か上進したるあるを見る時も惡魔は嫉妬よより
て彼を誘はん。これ人をして己の弱きを知らしめ其の才能受けたる所のよ
自ら誇らざらしめんが爲めよ神の放任よよりて生ずるなり。

四十一、己れの行跡よりも越て名聲を有するは其の嘖々する所のものを
もて己を喜ばせざる者又は其れを諒とせざる者よは少しも害を與へざら
ん。是れ猶殺人よ讒せられたれども絶てかくの如きを爲さざりし者と同じ
かるべし。〔讒言は傷つけざるなり〕かくの如き者は必ず思ふべし人々我れの
如何なるを知らずして我れを好く意ふなりと。

四十二、汝は聖使徒パウルの訓言を有す曰く』凡その事察へて善なる者を
執れ』と。ソルン前五の廿。人が神を畏るゝよよりて行ふ所の事はすべて其の
靈魂よ益をあらはすゆゑよ諸父と談話するはもし汝よ益をあらはすなら
ば此を爲すべし。されども余は左の如く意ふなり神の爲めよ談話するも可

なり神の爲め談話せざるも亦可なりと。

四十三、己の心を和げよ、さらば心は改まらん、汝ち心を和くる程は我等が主ハリストスイイススに於ける永生の爲めと思ふの念を心よ發見せん。

四十四、己の精舎に在る者にして己の意願を截つとはすべて身の安樂の如何論なくこれに留心せざるの謂なり、肉に屬するの意願は如何なる場合、於ても身を安樂にするにあり、故に身よ安樂を與へずんば知るべし、精舎に在りて己が意願を斷つなるを、されども魔鬼が働むる所の意願は自ら己を義とせしむると己れに信せしむるとあり、されば其時人は魔鬼の爲めよ捕へらるゝなり。

四十五、『主イエイススハリストス神の子や我等を憐み給へ』と此の祈禱を練習するは果して宜しきか、或は神の書を學び詩篇を誦するは更よこれより勝るか、彼も此も共よ爲すべく、彼れ此れより多からず、此れ彼れより少からず、交々これを爲すべし、録する所の如し、『此を行へよ、彼も棄つべからず』馬太

廿三の廿三

四十六、祈禱の規程の終りに至り聖教會の平安の爲め王と執政との爲め衆人の爲め貧者と嫠婦との爲め及び其他の爲め、祈禱を行ふは宜しきなり、けだし此事は使徒の遺訓なればなり、さりながら此を執行しつゝ己れをこれに堪へざる者又はこれに力を有せざる者と認むべし、又すべて祈禱を願ふ者の爲め、祈禱するは宜しきなり、けだし使徒は言へり曰く、『互に祈禱すべし、愈ゆるを得べきを致さん』(イアコフ五の十六)されば某等は使徒の爲め、祈禱したりき、誠命を等閑にする者は自から己を罪するなり、故に欲すると欲せざると論なく、誠命を行ふよ己を強ゆべし。

四十七、兄弟を訪問するは宜し、されど空談するはあし、實事は汝のいかよ行ふべきを教へん聖神父等の會話したるよ、效ひて近者を訪ひ空談を慎むべし。

四十八、如何なるは善き意願のそみにして如何なるは悪しき意願なるか、—それ

身の安樂はすべて我が神の憎む所なり蓋し彼は自からいへらく『窄き路をもて生よ入るべし』馬太七の十四と此路を選ぶはこれ即ち善き意願なりされば百般の事よ於て此誠命を持する者は己の力よ應じ甘んじて自ら患苦を選ばん汝は使徒の言ふ所を知らざるか曰く『己の体よ克ちてこれを服はしむ』コリント前九の廿七体の反對するよ拘らず神の人が願ふてこれを服はしむるを汝果して見るかすべての人よ對し救の善願を有する者は己の必要をもて促さるゝ所の行爲よ對してこれよ小なる患苦を混するなり例へば軟床よいぬるを能くすれども自己の願より小なる患苦をえらびて席上よ横臥するの類是なり是れ即ち神よ依るの意願なりされども肉よ屬するの意願はこれと反對なるものよあり即ちすべてよ於て安樂を得んとするよあり難哉救はれんとすべてよ於て己を安からしめて救はれんと欲する者はいかなる迷ぞ天國はたゞ己を強ゆる者これを得べし馬太十一の十二もし少しくも己を強わすんばいかにぞ救はるゝを得ん。

四十九 思念は朝よ侵襲す如何んして然るか——誰か空虚よして居るあらば其來る所の思念の爲よ占領せらるべしされどももし先きよ占領せらるゝあらば彼の思念をうくるの時を有せざらん故よ早晨より磨石を持すべし〔智識を己の權よ持すべし〕さらば麥を磨きて食用の麵包よ充つるを得んされどもし汝の敵が既よ汝よ先んずるあらば麥よ易へて彼をもて磨石即智識をもて種を磨かん。

五十 清くして靈神なる祈禱をいかよして賜はるべきか——けだし我等の主イエスキリストは願へよ汝よ與へられん尋ねよ得ん叩けよ汝よ啓かれん〔ルカ十一の九〕と宣ひしよより保惠師なる聖神を遣はされんを至善の神よ禱るべしさらば彼は來りて汝をすべてよ教へ悉くの奧密を汝よ啓示せん彼を尋ねて己が教導者たらしむべし彼は誑惑或は放心を入れざらん怠慢煩悶或は思の催眠をゆるさざらん目を照らし心を固め智を高めん彼れよ貼ぎ彼れよ信じ彼を至愛せよけだし彼は無智者をして智者

たらしめ思を樂ませ能力と清潔と歡喜と正義とを與へん、耐忍と溫柔と愛と和平とを教へ且此等を賜はん。

五十一、主は病者より休レ歸するの奉事を促さずして靈ニ屬するの奉事即ち祈禱を促す、けだし彼れいへらく「間斷なく祈禱すべし」ソルン前五の十八、休ニは其の要求ニ對して幾分か少なく興ふべし、けだし父の方法は總て其の現在ニ於て飲を以ても食を以ても重荷を負はされざるニあり。

五十二、來る所の思念の爲ニ思慮するを自分ニ許すなかれ、神の前ニ俯伏し己の弱さをあらはしていふべし、曰く主ヨ我は汝の手ニあり我れニ助けて我を彼等の手より救ひ給へど、されども汝ニ留在して汝を捕ふる所の思念は、これを汝の父ニつぐべし、さらば父は神の助けニより汝を癒さん。

五十三、詩を學ぶを廢するなかれ、けだし是れも靈神上の行ニ屬すればなり、而してこれを暗唱するをつとめよ、是れ汝の爲めニ益あり。

五十四、ア、無智なる者ニ罵らるゝとなかれ、己の敵を信用すべからず、も

し己の爲ニ慮るを廢て且怠るあらば敵は重ねて來らん、兵士は戦時ニ要する所のものを平和の時ニ學ぶなり、見よ主の蛇ニつげたるを、曰く「彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん」創世記三の十五、人は最後の時ニ至る迄己の爲ニ慮るをすつべからず、されば兄弟や己れニ注意せよ、而して敵の寐ねず且怠らざるを知りて忿怒、虚誇、睡眠及び其他の欲ニ用心すべし。

五十五、己の心を舊人の思念より清めよ、神の賜はたゞ清き者ニ納れらるべくたゞ彼等ニ與へらるゝなり、汝の心が忿怒怨恨及び其のこれニ類する舊人の欲ニて搖撼せらるゝ間は睿智はこれニ入らざるなり、もし神の賜を願はゞ他の器具諸欲を己れより投出すべし、さらば神の賜はかのづから汝ニ入らん。

五十六、もし眞實の路を知らんと欲せば其路は次の箇條ニありと知るべし、即ち己を打つ者ニ接するを煖むる者ニ接するが如く、譏謗する者ニ接するを賞賛する者ニ接するが如く、侮辱する者ニ接するを尊敬する者ニ接す

るが如く、及び壓虐する者も接すると慰藉する者も接するが如くするとは是なり。もし常例よりて汝も與ふべき所の者を與へざるをあらは哀むなかれ、却て言ふべしもしこれ神の旨のありしならば我はこれをうけしならん、己を不當の者と思ひなして自義の心をすてよ、もし汝は何なりとも演するあらんよ我れ善くいひたりといひ或は智識にて何か理會する所あらんよ、善く理會したりといひ彼を好くなせり此れも善なりといふあらば汝は神の途を去るを遺し。

五十七、敵は我儕も對して酷だ無慚なり、されども自ら謙するあらば主は彼を空うせん。常も自ら己を責めん、さらば勝利は常も我もあらん、三事は常も勝を奏したりき、己を責むると、己の意願を己が背後も棄つると及び己を全人間より卑く思ふとは是なり。

五十八、神の憎める舊人の諸欲より我が心を清むるも盡力せん、我儕は神の殿なり、されど神は諸欲も汚されたる殿も住み給はず。

五十九、汝の慮りを神も任かし其の悉くの配慮を彼れも托ぬべし、さらば彼はすべて汝も關する所のものを其の欲する如くも建設せん、己を神も付すものはすべてを全心より且死に至る迄彼れも付すべし、神は感謝と忍耐と又罪の救しを得んが爲めも行ふ祈禱との外は何も汝より促すあらず。

六十、知るべしすべては於て安樂を願ふ者は「汝ち生時よ於て善をうく」カ十六の廿五」の聲を何時か聴くあらんを、弱わるべからず我等は己の病症を我等より尙善く知る所の仁慈の神を有するなり、失神せず又は難儀と思はざらんが爲めは忍耐の終りよ、注目せよ「我れ永く汝をすてず汝を遣れず」と宣ひし神は遣し「エウレイ十三の五、イイスナワン一」の五

六十一、物体上の禁食の爲めは憂ふるなかれ、もしこれを持続する能はずんば、彼は靈神上の禁食なくんば何も重きを有せざらん、神は身体の薄弱なる者より禁食を促さずして強健なる者より促す、身体を少しく寛恕すべし、こは罪とならざるなり、神は汝より禁食を促さず、汝の躰の病ある時よ、何と

なれば汝も遣はし、病を知らばなり。されどもすべての爲め、神に感謝すべし。

六十二、毎日何を練習すべきか。汝は若干唱詩を練習すべし、若干口づから祈禱すべし、己の思念を試み且守る。充てんが爲、時が要用なり。正餐、種々の食物を多く用ふる者は多く食ひ且樂む。されども毎日同一の食物を用ふる者はたゞ樂んで食せざるのみならず時としてこれが爲め、煩囈を覺ゆるとあるべし。我等の性情は於ても此の如きあり。たゞ完全なる者は同一の食物を毎日煩囈なし、用うる。己を習はすを得べし。されば誦詩と口づからの祈禱と、縛らるるなかれ。然れどもこれを爲せよ。幾ばくか主は汝を堅め給はん。且讀經と内部の祈禱をもすつるなかれ。彼を若干此を若干爲すべく、主の意を喜ばして日を送るべし。完全なる我等が諸父は一定の規則を有せざりき。されども全日の間、其の規則を履行せり。若干唱詩を練習し、若干口づから祈禱をよみ、若干思念を試みたりき。少なくとも食物の爲めも

慮りぬ而してすべて此を神を畏るゝの畏れにて爲したりき。けだし言ふあり。何の行は論なく、悉く神の榮の爲め、行ふべし。『コリント前十の三十一』
六十三、いかゞ己の思念を試むべきか。如何も心の奪はるゝを通るべきか。―思念を試むるとは次の如し。汝も思念の來るあらばこれより何事の生せんとするを察すべし。汝も例を擧てこれを示さん。誰か汝を怒らすとあらん。―思念は汝を熨して彼も何なりともいはしめん。とすと想像せよ。されども汝は其の思念もつげていふべし。もし我れ彼れも言出づるあらばこれより彼の心を擾し彼は我れ對して傷まん。されば少しく忍耐して經過せんと。かくの如くすべての惡念もつきても其惡念の何れ誘引するを自ら己れも問ふべし。さらば惡念は止みなん。さて心の奪はるゝと關しては知るべし。こは更なる大なる警醒を要するを。諸父はいへらくもし汝の心を淫慾も誘ふあらばこれより貞潔を想起せしむべし。されどもし貪食も誘はばこれより禁食を記憶せしめよ。さてかくの如く他の諸欲も關しても同く行ふべし。

六十四、 間断なく祈禱するとは無欲の程度に關係せん且此れは由りてすべては教へんとする聖神の來臨はあらはれんもしすべては教ふるならば祈禱をも教へんけだし使徒はいへらく「我儕求むべき所のものを知らずされども聖神は言ふ可らざる慨嘆をもて我儕の爲に求む」ローマ八の廿六。

六十五、 規則を必ず有すべきか。―食ひ且飲む所の人はありては其の彼を喜ばす間は食飲すると當然なるべしかくの如くもし汝は讀經する望みの來りて己の心は此の感動を見るあらば出來るを讀むべし詩を唱ふよつさても同く行ふべしされど汝の力は應じて間断なく神に感謝をたてまつり『主を矜めよ』とよばんとをつとめよ畏るゝなかれ神の賜は易らざるなり。

六十六、 一切の爲めは感謝を神に報ひよけだし感謝は薄弱の爲めは中保となればなり汝の規則は自己の思念に注意して生活し自ら己れよつげていかんして我れ神を迎へんかいかんして我れ往時を送りしかといひつゝ神を畏るゝの畏れを有するよあるべし。

六十七、 いかなる場合も於ても己れを算ふるよ足るものとするなかれ他と等しからんを求むるなかれさらば汝は不愉快を興へざらんが爲に何も汝を憂すものあらざらん且記憶せよ汝は何の故にか兄弟を嚴責するあらば神もすべて汝が少時より爲しゝ所の事の爲めは汝を嚴責するを。

六十九、 身の安樂を避けん我等を神より遠ざけざらんが爲めなりけだし安樂は神の憎む所なればなり神は我等を少しく憂愁せしむけだし憂愁なくんば神を畏るゝの畏れは於て進歩あらざればなり。

七十、 謙遜は己を塵土灰燼と看做すあり即ち實際かくの如くは看做してたゞ言のみよあらざるあり又我は如何なる者か誰か我を算ふるよ足るものとするかといふあり。

七十一、 神を畏るゝと神に感謝するより離れ落ちざらんが爲に細よ己れに注意する時は汝は善く闘ふなりもし眞に旅行者となり赤貧者となるあらば汝は福なりけだしかくの若き者は神の國を嗣げばなり。

七十二、もし神に於る内部の行爲の人を助くるあるなくんば外部に於て勞するは徒然なり。心の悲痛を以てする内部の行爲は心の眞實なる靜黙を生せしむべく又かゝる靜黙は謙遜を生せしめて謙遜は人を神の住所たらしむるなり。されば神が住し給ふ人より惡鬼と其の首領たる魔鬼と其の耻づべき諸欲とは逐はるべくして人は聖とせられ照らされ清められてすべての恩恵と仁慈と喜悅とを充さるゝ神の殿となるを致す。此の人は捧神者となるなり。されば内部の人の力に應じて己の思念を謙遜ならしめんとを勤むべし。然る時は神は汝の心の目を啓きて眞の光を見せしめ我等が主ハリストスイイスの爲め我れ恩寵をもて救はれたりといふを得せしめん。

七十三、神の意に適せんと欲する者は己を要して近者の前より我意を絶つべし。主が『天國は強きを得らる強き者はこれを奪ふ』馬太十一の十二といはれしは一は此事にかゝるなり。

七十四、体は屬する者を靈は屬するものに従はしめざらん間は諸欲は我等は弱むるあたはざらん。

七十五、すべてに於て極至の謙遜と從順とを得よ。けだし彼等は悉くの欲を抜きてもろくの善を植うる者なればなり。

七十六、己の心を二の惡欲即ち遺忘と不注意との爲めは襲はるゝ心の睡眠より醒ましてこれを神を畏るゝの畏れを煖めよ。煖められて心は未來の善を希ふの希望をうくべくこれより汝は未來の善を慮るの心を有すべし。且此を慮るよ由りて心の睡眠のみならず五官は屬するの睡眠も汝より離れん。其時汝は太關の如くいはん。曰く『我の意は於て火燃えり』聖詠三八の四と。此の二欲をつきていひし所のものは悉くの欲も適用すべし。すべて彼等は恰も枯れたる枝の如く夫の靈火によりて焼けん。

七十七、靈神上の諸の苦行をつきて汝は告げん。心の守りなくんば彼等は一も人も歸せず。

七十八、汝は或は誦經を務むるも或は詩を學ぶ記憶するを務むるも間斷なく神を記憶せよ、けだし神はいへらく「我が心は溫柔謙遜なり、汝ち我も學ばば、汝の靈も安きを待たすべし」【馬太十一の廿九】。

七十九、我等が死も生も我等が手より、復傳律令三十九の十九、もし前罪を復ぬるとなくんば最早神より罪の赦しを得ん、たゞ更も惑はされざらん、
「視よ、汝は愈たり、再び罪を犯すとなかれ、恐くは以前に勝ざるの禍も遭はん」
【イオアン五の十四】。失望より遠ざかるべし、愛と信と望とをもて神も配すべし、さらば永生を得ん。

八十、いつれの時よも人はすべてよ我意を絶ちて謙遜の心を有し且死を常と眼前より有するあらば神の恩寵によりて救はるゝを得ん。

八十一、始を置くとはすべて神の憎む所のものより遠ざかるを意味する、よあらざして何ぞや、されどいかにして此れより遠ざかるべきか、質問せず商議せずしては一事も爲すべからず、又不適當の事を絶ていふべからず、而

して己を無知なるもの腐敗したる者、卑下なる者及び全く何も知らざる者と承認すべし。

八十二、汝の意願は汝も感動の心の起るゝ妨ぐるなり、けだし人は我意を斷離せずんば中心の惻怛いたみを得る能はざればなり、されど不信は汝も我意を斷離するをゆるさざるべくして、不信は我等人間の榮譽を願ふより生ずるなり、もし眞も自分の罪を哭せんと欲せば自己も注意すべくすべての人の爲め、死すべし、意願と自義の心と諂媚と此の三者を斷離すべし、さらば實も感動は汝も起るべく神は汝をすべての惡より庇はん。

八十三、身体を要求を満足せしむるの外は口腹を飽かしむるが爲も誘はるゝなかれ、食と飲とをうくるをもて己を喜ばすなかれ、人を議せざるやうも戒愼すべし、從順なれば汝は謙遜も達すべくすべての欲は汝より消失せん。

八十四、救を容易なる事の様も思ふなかれ、彼は勞苦と勉強と幾多の汗と

を要するなり。己の体を喜ばしめて自ら弱わるなかれ、然らずんば汝を貶おとしさん。大人も己れに注意せずんば彼の爲め、貶しめらるゝなり。

八十五、父イサイヤのいへらく人が罪の甘きを感じゆるある間は罪は未だ其人は赦されざるなり。我れ罪の甘きを感じゆるよぞ我れ赦免のあらざるよ由り思は我を擾すと。父イサイヤの言はたゞ罪の滋味を感じゆるのみならずこれをもて自ら喜ぶ所の者も關す。されどたとひ罪の滋味を記憶し來るありといへども此の滋味の働を繼續せしめず却てこれに抵抗して格闘する所の者もは以前の罪をゆるさるゝなり。

八十六、役事する者イブロン補祭はヘルウィムの如く總て目なるべく總て智なるべし。彼は畏れと戦さどもて天上の事を思ひ且考へ且稱讚すべし。けだし不死なる王の体と血とを戴けばなり。彼は亦セラフィムの形狀をあらはす。何となれば讚榮を歌ひ聖扇よて奥妙なる機密を覆ふと恰も聖翼を以てするが如くしこれよ由りて地とすべて物質も属する者どより自ら高く昇るを形

つくればなり。彼は智識をもて内部の人の殿も於て我等が神の莊觀なる光榮を謳ふの凱歌を絶えず高くうたふべし。曰く「聖々々なる哉主、サワオフ汝の光榮は天地も遍し」イサイヤ六の三。

八十七、間斷なく己を罪するあらば汝の心は傷み悲んで悔改も向はん。故に聖預言者もより「先づ汝の不法をいへ義と稱せらるべし」イサイヤ四十三の廿六と宣ひし者は汝をも義と稱すべくすべての定罪より免れしめん。けだし聖書にいふあり「神は彼等を義と稱す、誰かこれを罪するか」(ローマ八の三十四)。

八十八、天然の憤激あり又天然に反するの憤激あり。天然なるものは慾の望の成るよ反對すべしされば彼は健全なるものとして治療を要せざるなり。天然に反するものは諸の慾望の成らざるあれば起る。此の後者は慾望の強き程は最強き治療を要す。

八十九、神は靈と体とを無欲なるものよ造り給へり。されども悖逆もより

て彼等は諸の欲に陥りよき。諸欲は謙遜の爲めは焼かるゝこと。火は焼かるゝが如し。

九十、汚穢なる欲(淫慾)を根絶せん爲めは心の勞と躰の勞とを要す。心の勞は心が絶間なく神に祈禱するにあり。又躰の勞は人が己の体を制し力に準じてこれを服はしむるにあり。思念と同意するとは百方許さるべし。思念との同意は總て何物か人の氣に入るあらん。人が心中にこれを喜び楽しんでこれを回想するの時あり。されども若し誰か思念を抗拒し、これをうけざる様はこれと共に開戦するあらば是れ即ち同意をあらすじて戦なり。さらばこは人を練達と進歩とを導かんぞす。

九十一、誰か我が爲めは祈禱せよといふあらば己の心中に左の如くいふべし。曰く「願くは神は我等を矜まん」と。此れにて足れり。されども彼を始終記憶するとは是れ互に祈禱するを能くし得る完全者の行なり。

九十二、(淫慾に對し)目を守るべし。飽くまで食するなかれ。敵の悉くの羅網

を破壊するの謙遜を得よ。敵は讓るなかれ。左の如くいふて絶間なく祈禱すべし。曰く「主イエスキリストよ我を耻つべき欲より救ひ給へ」と。さらば神は汝を憐まん。それ人は己れに不注意なるより、即ち其の先きに成し遂げたる事又は其れに類するの事を己の心に回想するをゆるすより、其の肉慾は誘はるゝとあり。もし思の此れは旋轉するをゆるすあらばたとひ体を以てせずとも精神にて思念と同意するより、戦は増大して滅亡に至らん。かゝる人は自分の物に自分から火を點するなり。されば自ら懼々して己を悪しき記憶より懇に守るべし。これ自ら己に火を點せんを恐れて欲念の爲めは引誘せられざらんが爲めなり。又逢迎と談話とより及びすべて罪に致すの端緒より遠ざからんが爲めなり。すべて汝の生活の秩序をも此れに適準せしむべし。謙遜と涕泣とを愛すべくすべてに於て我意を斷離するに苦辛すべし。談話の爲に己を弱らすなかれ。けだし談話は汝をして神の爲に大に發達するを得しめざればなり。汝の感覺の諸機關、即ち視ると聴くと嗅

くと味ふと觸るゝの諸官を力を用ひて勒制すべし。さらば汝はハリストスの恩寵より大に發達せん。慎んで汝の家寶をハルデヤ人よ示すなかれ。列王記下廿の十二―十八然らずんば彼等は汝を俘よしてワワ、ロンの王ナウホドノッルよ引率せん。列王記下廿四の十二是れ言意は自から己れよ誇るなかれ。けだし此れよ由り己の靈寶を魔鬼よ示して魔鬼は汝を捕ふべければなりと。イイヌスを得んが爲めよ彼れよ趨り付くべし。もし大に發達せんと欲せば自ら勤苦すべし。

九十三、堅固の心をもて慾念よ抵敵すべし。けだし格闘者よして苦戦するあらずんば榮冠を蒙らざるべければなり。修道士の行は戦を忍耐すると心の勇氣をもて彼れと對立するよあり。さて余(父ワルソノフィ)は少年の時淫慾の鬼よまばく強く誘はれたりしがかゝる思念よ對して戦ひこれを抗拒しこれと相和せず永遠の苦を自ら己の目前よ想像しつゝ苦辛したりき。五年の間余は日々かくの如く行爲したりし。神は我を此の思念より弛め

給へり。間斷なき祈禱と涕泣とは此の戦を空うせん。

九十四、耻づべき諸欲より自から救はれんと欲せば何人とも自由よ交際するなかれ。此れよ由りて汝は浮誇より免れん。けだし浮誇よは諂諛が混合せらるべく諂諛よは自由の交際が混合せらるべくして自由の交際は悉くの欲の母なればなり。

九十五、智より速なるものはあらじ。すべての必要の時これを擧げて神よ向はしむべし。さらば彼は汝よ要用なる教訓將た要用なる助けを與へん。

九十六、中心の憂愁なくんば誰れも思念を見分るの才能を得ざらん。されども神が人よ此の才能を與ふる時は彼は常よ神の神をもて思念を見分るを最早能くし得ん。

九十七、思慮の賜を得んが爲めよ我等の心の何を勤むべきとを我れよ教へよ。又神を念ふ間斷なき記憶の事を書るし給へ。―それ汝が心の勤勞は神よ間斷なく祈禱するよあるべし。願くは神は汝をして自ら迷はしめず將た

其の一己の望みは従はしめざらん、此れは由りて汝は思慮を得ん、されども
 不斷の記憶即ち教訓は基礎を据うべし、畏るゝをなかれ、神は汝を固め且汝
 を確定せん、尙汝は弱らずんば稜るを得んとの希望をもて播くべし、(コリン
 フ前九の十ガラテヤ六の三)

九十八、熱心は時として來り又時として去る、神を念ふ記憶は或は熱心
 で守られ或は勉強して僅く保持せらる、然のみならず心は我が欲するなく
 して偏僻なる或は無智なる記憶を出し或は時ならざる思念を出たす、如何
 すべきや、中心の憂愁をもて熱心と祈禱とを得るを自ら勤むべし、さら
 ば神は汝は常くこれを得せしめん、不注意の爲は自から生ずる所の遺忘は
 彼等を逐出すべし、清醒の賜は諸の思念の入るを許さるべく、もし入るあ
 るも其をして害を爲さしめざるべし、神は願くは汝は清醒と不眠とを與へ
 ん。

九十九、自ら弱わるなかれ、尙時を有する間は練習すべく自ら謙遜すべし、

順良なれ、服従せよ、さらば謙遜なる者は恩寵を與へ驕傲なる者は反對する
 神は汝は助けん、(ペートル前五の五) 間斷なくいふべし、『イエスマヤ我は助け
 よ』と、さらば助け給はん。

百、朝ははいさゝか心内は存すれども其後事は交、汝を牽引し晚く及んで
 發見せらるゝは空虚なり昏迷なり及び失心なり、如何かすべき我れ亡びん、
 汝は此よりて望を絶つべからず、舵手は其舟の波よりたると時救は望
 を絶たず、漕は漕よする迄は舟を御するなり、此の如く汝も事は引誘せられ
 て放心せしを見れば預言者と共いふて己を其途の始めは呼戻すべし、曰く
 『我れ言へり今始めたり』(聖詠七十六の十一、希伯來原文は依る) 且又己が内
 部の行爲より離れずして其の遇ふ所の事を檢みしいかよこれを處理すべ
 きを考ふべし、神の爲めは慮るの配慮は靈魂の救は於て行ひ且遠ぐる所の
 靈神上の行爲なり、己れは最必要なる事をもて限りを定め區々たる小事の
 爲は己を累さざらんを及ぶ丈盡力すべし、聰明は己れは注意せよ、さらば

神は汝を助けん。

百一、願くは主は汝ら諸の事より於て聰明より行ふを得んが爲め汝は靈智を興へ給はんを。己の舌を空談より禁じ腹を嗜甘より禁じて近者を怒るなかれ。過甚なるなかれ。己を虚しきものと思ふべし。衆人より愛を守るべく、何時か神の面前より現はるべきを記憶して常に己の心より神を有すべし。〔聖詠四十一の三〕此を守るべし。さらば汝の地は神より百倍の果を献らん。

百二、己を虚らすとは如何なる意か。——己を何人とも比べず善行より就ては我れこれを成せりといはざるを謂ふなり。すべてを失はざらんが爲め、高慢を戒むべし。

百三、我れいまだまるくの造物より己を卑く視るべき所以の者を有せず。されども己の良心を試す時は己れもろくの造物より卑く視るべき當る者なるを發見す。——今や汝は正路に入りぬ。これ最眞理なり。神は己を卑く視るの量より汝を導かん。

百四、いかなる途より速く救はるべきか。勞苦か將た謙遜か。

——眞實の勞苦は謙遜なし。成る能はず。けだし勞苦は自づから徒然と歸して無となるべければなり。聖書にいふ「我の謙遜と我の勞苦とを審みて我がすべての罪を赦し給へ」〔聖詠廿四の十八〕ゆゑに謙遜を勞苦と合する者は速く達せん〔目的を〕。謙遜と自卑〔外部の状態より於るの自卑〕とを有するものも亦達せん。けだし自卑は勞苦より代るべければなり。されどたゞ一の謙遜のみを有する者はたとひ進歩すといへども左程速く達するにあらず。眞の謙遜を得んと願ふ者はいかなる場合に於て何を以てなりとも斷じて己を尊視すべからず。眞實の謙遜は此より存す。

百五、いかにして遺忘より救はるべきか。——主が來りて地に投ずる所の火をうくる者は〔ルカ十二の四十九〕遺忘と心の奪はるゝとを知らざらん。けだし常に此の火に觸るればなり。試す物体の火を例に取るべし。人は何物より占領せられたるよせよ。其上より熱炭を投ずるあらば其の誘惑より止まり居る

とは最早少しも能はざらん。もし汝は心の奪はるゝと遺忘とより救はれんを欲せば己の靈火を得るの外はその目的を達する能はざらん。けだし此の温煖よりて遺忘と心の奪はれとは消失すべければなり。されども此の火は神に向ふをもて得らるべし。もし汝の心が日夜哀痛して主を尋ねるなくんば汝は大に發達するとあたはざらん。されども若しすべて他事を擲ちて此れに従事するならば此を達せん。止まりて識れよ。聖詠四十五の十一。

百六、謙遜はいかなる場合も於ても何事の爲めも己を尊視するあらざると萬事も於て我意を絶つと人々も柔順なると外より我れも及ばす所の事を心を攪すなくして忍耐するとあり。眞實の謙遜はかくの如し。されば虚誇は己の餘地を見着けざらん。謙遜なる者は其の謙遜を言語も表するを要せず。彼の爲めは「我を免るせよ。或は我が爲めも祈禱せよ」といふて足るなり。又謙遜なる者は下賤なる事を自から求めて爲すを要せず。けだし彼れ

も此れも虚誇も導き進歩も妨げ益よりも害を生ずればなり。されども何か命せらるゝ所ある時は逆らはず聽從して行ふなり。これ大なる進歩も導くなり。自卑も二種類あり、一は心の自卑として一は外よりうくる所の卑辱もよりて生ずるの自卑なり。外よりうくる所の自卑は心の自卑より勝れり。けだし自ら己を卑うするは他よりうくる所の卑辱を忍耐するより易ければなり。何となれば後者は更なる大なる悲痛を心も生ずるよよる。

百七、人々の賞賛する時己を謙りて其れも抗言するは宜しきや否——沈黙するとは更なる益あり。けだしもし誰か答ふるあらば是れ即ち賞讚をうくるなり。これ最早高慢なり。彼れもし謙遜して答ふと思はんもそれだも最早高慢なり。けだし彼れもし自から己の事をいふ所の言を同く他人より聽くある時は堪ふるあたはざるべし。

百八、言語及び交際の自由も腹を喜ばすとも心の悲痛あるなく。清醒と涕泣とあるなくんばこれを止むる能はず。凡ての欲は人々が困苦して得る所

の謙遜も克つなり。

百九、哀哭は涙より生せずして涙は哀哭より生ず。もし人は他の罪も注意せずして獨り己の罪を見るあらば哀哭を得ん。けだし此れは由りて彼の思念は收束せらるべく且かくの如くは收束しつゝ神に依るの悲哀を心も生ずべく(コリント後七の十)而して此の悲哀は涙を生ずるなり。

百十、高慢するなかれ、何となれば此をもて己を害すればなり。諸父は己の思念も注意するが爲め、時を定めたりき、言ふあり朝も自ら省みよ、汝は夜をいかよ過こし、やど、晩も亦同く省みよ、日をいかよ過こし、やど、而して日中は諸の思念も煩はざる、時も自ら己を省察せよ。

百十一、もし欲念の心も入るあらば何をもてこれを拒反すべきか、これに抵抗し或はこれに禁戒を發するを恰もこれに向つて怒るが如くするを以てすべきか、或は神に趨りつき其前も俯伏して己の弱きをあらはすを以てすべきか。——それ欲は愛も同じ、されば主はこれを區別せずしていへらく

『汝ち愛の日も我を呼べよ我れ爾を脱れしめん、此を以て汝は我を讚榮せん』
〔聖詠四十九の十五〕是故もすべての欲も對して神の名を呼ぶより有益なるはあらじ、されども抵抗するとは何れの人にも適するよ、あらずしてたゞ其の魔鬼が服従すべき所の神もよりて有力なる者も適す、さればもし誰か無力にして抵抗するあらば魔鬼はこれを罵りていはん、汝は我が權下もありて我も抵抗すと、又魔鬼も對して權を有する大人の行も亦同く魔鬼も禁ずべし、諸聖人中魔鬼も禁ずるを首天使ミハイルの如く權を有したるよよりて此を成し遂げたる者果して多きか、されども我等荏弱なる者もありてはたゞイエスの名も趨り附くべきあるのみ、けだし欲は既もいひしが如く即ち魔鬼なり、されば彼等は退かん、此の名を呼ぶよより。』
百十二、己れも注意すべく誠命を行ふも百方盡力すべし、されど何よ於てか勝たるゝある時は弱むるべからず、望を絶つべからず、更も起くべし、さらば神は汝も助けん、常も哀哭をもて主の仁慈の前も己を投すべし、願くは汝

を欲より脱れしめん。

百十三、多くの人よ接して談話するを避けよ、けだし怠慢と薄弱と不従順と暴戻とはこれより生ずればなり。

百十四、思念は我れよつげていへらく沈黙は何よりも最入用よして彼は我れよ益ありと、思念がかくの如く我れよ勤むるは果して當を得るか。——それ沈黙とは與ふべく又は受くべき所の者と美食又は其他これに類するの行爲とより己の心を止むるよあるよ非ずや、主が賊よかゝる者の譬をもて學士を責め且問ひて誰か彼よ近き者かといひし時學士は答へて『彼れよ矜恤を行ひし者は是なり』といへりルカ十の三十七又聖書よ主は『矜恤を欲して祭を欲せず』馬太十二の十七といへり、もし汝は祭よりも矜恤の勝るを信せば汝の心を矜恤よ傾くべし、沈黙は人が自から得るある、即ち無玷なるを得るよ先だちて自慢よ赴くの緣由を人よ與ふるなり、眞實の沈黙の位置を有するはたゞ人が最早十字架を負ふたる時よあるのみ、ゆゑ汝は憐む近者

をあらば助けをうけん、されどももし汝の量を越て高く上らんと欲し己を憐みより止むるあらんよは知るべし、汝は有る所のものをも併て失ふをゆゑよ内部よ於ても外部よ於ても偏らずして其中を執るべし』主の旨のいかなるを悟るべし、蓋し時悪ければなり『エフェス五の十六』

百十五、内部よ於ても外部よ於ても偏らずして中を執れとは何を謂ふか、——是れ即ち人の爲めよ慮る配慮の中よ在る時は沈黙を敢てせず又己れよ怠慢ならざるを謂ふ、是れよ墜墮の危険あらざるの中道なる、沈黙よよりて獨り自ら居る時は謙遜を有すべし、されど配慮の中よある時は己れよ儆醒すべく己の思念を止むべし、而して是皆一定の時を以て限られざるなり況や日を以てをや。

百十六、己の思念を黙すべからず、げだし己の思念を隠す者は癒されずよ存すべし、さればたゞ其の思念をまばく神父よ質問するよよりて矯正せらるゝなり。

百十七、誰か己の群(思念)を守るとイアコフの如くするあらば睡眠は彼れより退かん、されば彼れいさゝか睡りかゝるあらんも彼の睡眠は他人の傲醒も同じからん、けだし心の燃ゆる火は彼をして睡眠も耽るゝ至らしめざるべく彼は太閤と共々歌はん、曰く「我が目を明よして我を死の寐りも寐ねざらしめ給へ」聖詠十二の四「此る程度も達して既よろの甘味を嘗めたる者は言ふ所の事を了解せん、かゝる人は嗜慾の眠りも熟睡せずしてたゞ天然の眠を利するなり、

百十八、汝ち奉事の時よ當りて神の爲めよ目を瞑するあらんよ汝の思念の集中するあらばたとひ汝と共々立つ所の兄弟等の爲めよ奇怪も思はるゝとも注意を向けるあるなかれ、

百十九、先づ枝葉よて被^{おほひ}茂るべし、其後神が命するある時は果實をもあらはすべし、

百二十、憂愁するなかれ、主の汝も助をあらはさざる間は仆れつ起きつ失

脚しつゝ又己を責めつゝあるべし、たゞ怠慢なるべからず、即ちたゞ自分の力も應じて己れも注意せよ、さらば神は汝を助けん、

百二十一、心の擾^{おそ}れと共々何もいふべからず、何となれば悪は善を生まざればなり、汝の思の静まる迄は忍耐せよ、而して静まる時よ穩^{やす}く「匡正も要用なる所のものをいふべし、

百二十二、驕傲と自義と浮誇とを戒めてこれよ對するよ謙遜と神を畏るゝの畏れと思慮とを以てすべし、汝の力も應じて此等の徳行を守るを努^{つと}めよ、さらば神は汝も助けん、

百二十三、誰か己の思念もつげて「我と神と即ち世も唯我等のみなり、さればもし彼の旨を行はずんば最早彼れも屬するよあらずして他も屬するなり」といふか又神をいかも迎へんを記憶して日々も自ら体より出するを待つか、——かくの如き者は救の路を探り得たるなり、

百二十四、神を畏るゝの畏れを以て己れも注意せん、而してもし善心なる

神の仁慈は依り我等は戦を緩減し給ふ。あらば其時にも油断あるべからず、けだし多くの人は既に援助をうけ己れは油断して倒れ、仆れたればなり。然れども我等は緩減をうけて神の我等を救ひしを記憶して感謝せん。又其の同じき欲も他の罪も再び陥らざらんが爲め、祈禱を止まらん。かくの如くもし誰か大食して胃脾或は肝臓の病にかゝるあらんは醫の親切と知識とよりて愈さるゝ。あらば己は經たる危きを記憶してあしき容態は再び歸らざらんが爲め、最早自ら油断を脱らざらん。主も其のいやせし者よ告げて曰く『視よ、汝は愈たり罪を犯すな。恐れは患にかゝると前よりも甚しからん』イオアン五の十四。よろしき兵士は常に平和の時も作戦の術を講ず、けだし戦時は戦の爲め、缺く可らざる所の者を便宜に學ぶを許さなければなり。言ふあり『備あれば擾されず』聖詠百十八の六十。人は最後の際に至るまで戦の配慮なくんばあるべからず。然らずんば狡猾なる敵。即ち『主が其口の氣をもて我れより亡すべき者』ソルン後二の八の虜となるの

運命は陥らん。老人のいひしを記憶せよ。曰くもし人は新天新地を造るありとせん。其時にも人は配慮なくんばあるべからず。

百二十五、使徒パウロは忍耐の力を論じて次の如く書せり。曰く『汝は要用なるものは忍耐なり。神の旨を行ふて約束のものをうけんが爲めなり』エウレイ十の三十六。ハリストと共十字架に上らんと欲する者はハリストと苦みを與ふする者となるべし。

百二十六、遺忘の事をいはん『我が呻吟の聲より我が餅を食ふを忘る』聖詠百一の六。到りし者は敵たる遺忘の勝つ所とならざらん。

百二十七、もし困苦の爲め憂愁するあらずんば謙遜を得ん。而して謙遜を得る時は罪の赦をもうけん。けだしいふあり『我が謙遜と我が困苦とを顧みて我がすべての罪を赦し給へ』聖詠廿四の十八。謙遜する時は恩寵をうけ而して恩寵は汝を助くるなり。希望をもて神の業に注意せよ。さらば神も汝の許可なし。汝の業を建てん。

百二十八、長老は問ふを得ざる時はすべての事の爲めは三たび祈禱すべし。さてかゝりし後心が何方に傾くを毫末と雖察視すべく此の如くにして行ふべし。げだし報道は顯然と有るべくどうでも心より了會せらるゝあらん。』

百二十九、何をか偽知識偽稱智慧といふか。——事は果して我が意ふ如くなれりと己の思念を信する是なり。此れより脱せんを願ふ者は何より於ても己の思念を信せず。すべてを其の長老に問ふべし。

百三十、もし救はれんとを願はば悔改すべくすべて汝に死を蒙らしむる所のものを絶ち太關と共いふべし。曰く『今始めたり』聖詠七十六の十二。故より今より我意と自義と傲慢と等閑とをすてこれより代へて謙遜と従順と溫柔とを守るべし。全く己を卑しき者と思ふべし。さらば救はれん。

百三十一、我意を絶つとは善なる事。於ては我意を絶ちて聖者の意を行ひ悪なる事。於ては己れ自から悪を避くるあり。

百三十二、〔淫行醜事又は嫉妬等の如き其の微細なる思念と粗大なる思念とよつきて〕——微細なる思念は力を盡して其の粗大なるを忽とする者は恰も左の人と似たるあり。其の家不潔にして種々の碎片を充て、中より細小の塵埃もあらん。彼れこれを清潔とせんと思立ちて先づ家より細小の塵埃を撮び出したれど石又は其他の蹟づきとなるべき物を遺しき。もし彼は細小の塵埃をすべて撮び出すといへどもこれより其家は未だ美麗を得ざるべし。されども石又は其他を撮び出たす時は塵埃も遺さざらん。げだし彼れも醜きをなせばなり。

百三十三、いかよせば神を畏るゝの畏れを我が頑なる心は確として存せしむるを得べきか。——すべてを神を畏るゝの畏れをもて行ふべし。且此の畏れを賜はらんが爲めは心備へて己の力に及ぶ丈心を其れに向けて神を呼ぶべし。すべての事。於て此の畏れを己の目前に置くあらば此の畏れは我が心は確として動かざるものとならん。

百三十四、神を畏るゝ畏れの我が記憶は來るあらん。我れ彼の審判を想

起して直ち感動するを數回これあり我れ此事の記憶を如何に受用すべきか。——それ此事の汝が記憶に來る時即汝の識ると識らずして犯しし所の事を感動する時は汝宜しく注意すべし此れ魔鬼の働きにより生じ愈大なる定罪に至らしむるにあらざらんかとされどいかよして眞實の記憶を魔鬼の働きによりて來る所の記憶より辨別すべきかと問ふあらんか宜く聽くべしかゝる記憶の汝に來るあらん汝は匡正をあらはさんと實際に勤むるならばこれ眞實の記憶にしてこれより罪は赦さるゝなりされど想起して神を畏るゝと審判とを感動するも其後再び同罪に陥り又は更におしき罪に陥るを見るあらんよはかゝる記憶は敵者よりするものにして魔鬼が此を汝に入れて汝の靈を定罪に付するものたるとは汝に知られんこれ汝の爲に二の明白なる途なりゆゑもし汝は定罪を畏れんと欲せば魔鬼の行を避くべし。

百三十五、朝時と暮時とを汝の思念を試みるが爲め適當の時とならし

むべし此の時汝は己れを問ふべし我れ夜又は晝を如何に送りしかど而してもし汝は何の犯罪をか發見するあらば神の助けにより匡正に盡力すべし。

百三十六、我が靈魂は多くの疵を有ちながらいかんして痛哭せざるか。誰か失ひし所を知らば其の爲め涕泣す。又誰か願ふ所ある者は其の願ふ所の者を得んを期し多くの旅行をなして多くの患難を忍ぶなり。

百三十七、或る他人の爲にはあらずしてたゞ獨一の神の爲め神に屬するの業を爲すを努めんされどもし此の如くならずんば汝の勞は徒然なるべし故に善を作して出來るは我が意志の爲に其勞の無益となるを致さしめざらんやうに己れに儆醒すべし。

百三十八、聰明に且實着に研究して何か汝の爲め善なるが如く見ゆる所の事よ於て浮誇或は動亂或は其のこれに類するものを發見するあらば知るべしその善は神よりするに非るをけだし神の善は常に心の開明と

謙遜とを増して人よ安靜を得しむるものなればなり。

百三十九、もし善なるが如く見ゆる所のものよして試を経て悪なるものと認めらるゝ時はこれを抛棄するを恰も誰か美味の如くよ見ゆる所の食物を嘗めんよ其の苦きを覺えて直ちよこれを口より吐出すが如くすべし。』
百四十、天性自然なる思念の推動よよりて善良なる者を思ふの場合も亦屢これあり然れども此をも神よ献ぐべし、けだし我等が天性は神の造なればなり。されど我等が此れ〔即ち善良の思を仕遂げんとは神の誠命よよらずんば能はざるを知るべし、即ち誠命を目前よ置くある時は我等の心はこれよよりて善良なる者を遂るよ固めらるゝなり。〕

百四十一、汝もしすべて善なる行を成しすべて誠命を守りし時は思を謙らんが爲めよ次よいふ所の言を記憶すべし、曰く『汝等すべて命せられし事をなせし時もいふべし無益の僕爲すべき事をなせしのみなり』とルカ十七の十況や我等一の誠命を成すをも未だ得ざりし時よ於てをや、かくの如く

我等は常よ思ひ善行よ由りて己を責め且己れよつげていふべし我れ此の行の神よ悦ばるゝや否を知らずと神の旨よ依りて作爲するは大なる行なり、されども神の旨を成すは更よ大なる行よしてこはすべての誠命を連合するなり、けだし神の旨よ遵ひて何なりとも作爲するは神の旨を成すよ比すれば個々なる且細小なる行なればなり、故よ使徒もいへり『後よある者を顧みずして前よある者を望む』』フィリッポ三の十三、それ彼は前進して及ばざる所幾ばくもなかりしといへども止まらずして常よ己を見て不充分なるものと思へり、故よそれが爲めよ上達したりき。

百四十二、もし誰か神を悦ばすの目的よ依らずして善なる行を爲すわらば此の善なる行は爲す者の意志よよりて悪なる者となるなり、人各常よ善なる行を爲すよ力を盡すべし、されば後來神の恩寵よより其の行が最早神を畏るゝの畏れよよりて成就すべきをも與へらるゝなり。

百四十三、汝ち何の善をか爲したるある時は汝は此の神の賜汝よ與へら

れたるは神の仁慈よ出づるを知るべし。けだし神は衆人を矜めばなり。されば神より汝よあらはされ引て悉くの罪人よも及ばんとする矜恤を汝は己の弱きよよりて亡きらんが爲めよ自から己れよ注意すべし。神より汝よ善の爲めよ興へられしものを惡よよりて失ふとなかれ。されど此の賜は汝が己を賞賛して汝よ恩恵を施したる神を忘るゝある時は失はるゝなり。然のみならず汝は仁慈者たる神よ感謝をささぐべき所の者を己れよ歸するを敢てするや。汝よ定罪をも引くあらん。使徒はいへり『汝ち何のいまだ受けざりしものあるか。もしうけしならば何爲ぞいまだうけざる者の如く誇るや』コリント前四の七。故よ汝は決して誘はれて善行の爲めよ汝を賞賛する所の思念よ依頼するなかれ。一切の善は神よ属す。

百四十四、諸聖人は聖神を己れよ有するを賜はりて聖神の殿となるなり。聖書よいふあり『彼等よ住り且歩み給へり』コリント後六の十六。罪人等は此れより遠ざかる。録する所の如し。曰く『睿智は惡なる靈よ入らず』智慧書一

の四。されど彼等は神の恩籠よて悔改の爲めよ守らるべし。

百四十五、詩を唱ふよ方り汝の心の高ぶらんとする時は録する所の言を憶ふべし。曰く『叛逆する者よ自から誇るなからしむ』聖詠六十五の七。さて叛逆するとは即ち神を畏るゝの畏れをもて聰明よ歌はざるを意味するなり。詩を唱ふよ方り汝の思の浮戯れざるや否を試すべし。さらば汝は其の浮戯るゝと又これよ隨て神よ叛逆するを必ず發見せん。

百四十六、詩を唱ふよ方り思念の爲めよ苦められ將た其れなくしても神の名を助けよ呼ばんよ敵は我よ密よつけていへらく神の名を間斷なく呼ぶは虚誇よ導くべし。けだし人は其時我れ善く行爲すと思ふべければなりと。此の事をいかよ思ふべきか。一それ病者の醫と其治療とを常よ要求し又漂流する者の溺没よ遭ふを免れんが爲め斷えず避難所よ達するよ急よするは我等の知る所なり。此よ由りて預言者も大よ呼んでいふやう『主は世々よ我等が避所たり』聖詠八十九の一。又いふやう『神は我等が避所と能力なり

患難の時よは速なる佑助なり』聖詠四十五の二。されば神は我等の避所たらば我等は其の言ふ所を記憶せん、曰く『汝ら患難の日よ我を呼べ我れ汝を脱れしめて汝は我を讚榮せん』聖詠四十九の十五。故よ我等は患難の時よ於て必ず緊要よ矜恤なる神を呼ぶを學ばん。されども神の名を呼ぶも思よて誇らざるべし。愚者よ非るよりは誰か人より助けをうけて自ら誇るか。されば我等は神よ必要を有する者として敵よ對して神の名を助けよ呼ばんよもし無智よあらずんば思よて誇るべからざるなり。けだし必要よよりて呼び憂ひて趨り附けばなり。然のみならず我等神の名を間斷なく呼ぶはこれたゞ欲を殺すのみならず欲の働きをも殺す爲の療法なるを我等は必ず知らざるべからず。醫者が療法適當の若くは膏藥を求めて患者の疵よ貼りて効あらんよ。病者は其の如何よ行はるゝを知らざるが如く實よ其の如く神の名も呼ばれてたゞひ其の行はるゝ所以を我等は知らずといへども悉くの欲を殺すなり。

百四十七。我が思の靜默して擾さるゝなく煩はさるゝなしと我か意よ思はるゝあらんよ。其時も主宰ハリストスの名を呼ぶを學ぶは宜きや否や。けだし思念は我れよつげていへらく今我等は平安よ居れば此れよ必要あるなしと。我等己を罪人と認むる間は此の平安を有すと思ふべからず。けだし聖書よいふあり『罪人よ平安ある無し』聖詠四十八の廿二。されば罪人よ平安あるなくんば此の汝にあるの平安はいかなるものなるか。我等は恐る。けだし録していへるあり。人々平和安固なりといはん時忽ちよして滅亡は彼等を襲はん。妊婦よ劬勞の來るが如く人々避くるを得ざるべし。ソル前五の三。されども亦神の名を呼ぶを廢せしめんが爲よ敵が狡計をもて心よ暫時平穩を感せしむるの場合あり。けだし神の名を呼ぶよよりて敵が無力よさるゝとは敵よ知られざるよあらざればなり。此を知りて我等は神の名を助けよ呼ぶをやめざらん。けだし是れ即ち祈禱なればなり。聖書よいふあり『間斷なく祈禱せよ』ソル前五の十八。さて間斷なきものは終り有

らざるなり。

百四十八、唱詩或は祈禱或は讀經の時、當りあしき思念の生ずるあらばこれに注意し清き思念をもてこれに抵抗せんが爲め、唱詩祈禱或は讀經を一時中止するを要するか。—これを輕賤すべく唱詩祈禱若くは讀經より子細に注意すべし、汝ち誦する所の言より力を借らんが爲なり。されどももし敵の思念を研究し始むるあらんは敵がすゝむる所の者、注意して何の善をも永く爲得るあらざらん。されば敵の狡猾が唱詩祈禱或は讀經を妨ぐるを見るあらは其時彼れと競争すなかれ、何となれば此れ汝の力の能くする所、あらざればなり、神の名を呼ぶに盡力せよ。さらば神は汝に助けて敵の詭計を空うせん。

百四十九、祈禱、讀經及び唱詩の時、感動をいかよして得べきか。—それ感動は間斷なき想起より來る。故に祈禱する者は己の行と又其これに類する行を爲す者のいかよ審判せらるゝを心よ想起すべし、視よ彼の恐るべき聲

は左の如し曰く『訓をうくる者は我を離れて永火に入れ』馬太廿五の四十二。さて讀經と唱詩の時、當り感動の生ずるは人が其の心を起して誦する所の言に注意し其の言中、籠もる所の力を己の靈中、受くるよかゝるなり、其の善なるものは善徳に熱心なる者とならしめんが爲め、又惡の爲めの報をいふものは惡を作す者、及ばんとするものを避けしめんが爲めなるよ。よる。されども此事を回想するを守りつるも其時、所謂無感覺の尙、汝に存するあらば弱むるなかれ、けだし我等が勉勵をうくる所の神は仁慈に鴻恩に且寛容なればなり、唱詩者のいふ所を常に想起すべし、『我れ切に主を恃むよ主は我に傾けり』聖詠三十九の二。此を學びて神の矜恤の速に汝に來らんとを望むべし。

百五十、我れ唱詩者の言の旨趣を子細に推究するを勤むる時、其言よりして惡なる意思に移ると屢、これあり。—敵が唱詩の言に因み、汝に向て戦を挑むよ工夫を凝せるを汝に察見する時、特別の勉勵をもて詩の言の力

は思を潜むるを勤めんは無用なるべし、注意と共に誘はれずしてこれを讀むべし、けだし汝はたゞ詩の言を唱ふのみなるも敵は其の言の力を知りて汝を敵する能はざればなり、さればかゝる唱詩は汝の爲に神を祈願するに代りて敵を勝つに資けん。

百五十一、唱詩を練習するの間或は又人々と會見の時諸の思念が汝を動搖せしむるあらん、我れ口にて神を呼ぶの便利あらずして必よて呼び或はたゞ神を想起するのみなる時は豈此れ我を助くるに不充分なるか、それ唱詩の時よあたり或は人々と共よする時よ汝を神を呼ぶべき場合あらん、汝は口づから發するなくんば神を呼ばざるものゝ如く思ふなかれ、彼は察心者よして心を見る者なるを記憶して汝の心中よ於て彼を呼ぶべし、是れ聖書よ述る所なり、曰く『爾の戸を閉ぢて隠微よある汝の父よ祈禱せよ』(馬太六の六)、されば我等は口を閉ぢ心中よ於て彼れよ祈らん、けだし口を閉ぢて神を呼び或は己の心中よ於て彼れよ祈禱する者はこれこれを命

ずる所の誠命を行ふなり、されども心中よ神の名を呼ばずしてたゞ神を想起するのみならばこは更よいよく迅速便利なるべし而してこは汝を助くるに充分なりとす。

百五十二、常よ心よ神を思念し或は言の助けを假らず中心よ於て神を祈禱するは宜きや否や、或時我れ此事を練習し我が思の散乱よ陥り宛ら夢中の妄想よ在るが如きよ遭遇したるとあり。——智識の正を失はず放心或は妄想に力めて陥らざるは是れ即ち己の智識を統御し常よ神を畏るゝの畏れよよりてこれを保つを得る所の完全者の行なり、されども神の爲めよ恒なる清醒を有する能はざる者は舌よも教訓を興ふべし(即ち舌を以ても神を祈るの言を復誦せしむべし)此れよ類するの事を我等は海を遊ぶ者よ於ても見るなり、それ彼の練達者は游泳の術を善く學び得たる者をば海の溺らす能はざるを知りて敢て自ら己を海中よ投ず、されども此の術を學び始むる所の者は最早深處よあるを知りて溺れんを恐るゝよより急ぎて深處

より岸上より遊ぎ來り而して暫く休息して再び身を深處に投ず、かくの如く
に練習するはこれ己れより先き既に此を學び得たる者の段に達せざらん
迄は此の術を完全と識らんが爲なり。

百五十三、多くの事件の爲めは祈禱する時は其の事件を各、祈禱は於て記
憶すべきや否。——汝ち許多の事件の爲めは祈禱せんと欲せば神は我等何
に於て必要を有するを知るより左の如く祈禱すべし、主宰主イエスキリス
トスは汝の旨を循て我を教へ給へど、されども欲の爲めなる時はいふべ
し汝の旨を循て我を愈し給へど、誘惑の爲めなる時はいふべし汝は我れ
に有益なる者を知る、我が弱きを助けて我れに汝の旨を循て誘惑より救はる
べきを得しめ賜へど。

百五十四、祈禱は於てはすべてを全能なる神の旨を托するやうに特
に留心すべし、而して其の祈禱の目的は我等が願ふ所をして神の旨の如くなら
しめんとを要すべし。

百五十五、讀經の爲め又は手工の爲めは坐して祈禱せんと欲するは思念
が我れを勸めて東に向はしめんとするあらば我れいかん爲すべきか。——坐
するが將た行くが將た何れに従事するか將た食ふか或は身体の需要の爲め
他の何事かを爲しあらんや東、西、向ふべきの場合ありとも祈禱する
は躊躇するなかれ、けだし我等は、間斷なく、又いつれの時にもこれを行ふべ
しとの誠命をうけたればなり、たゞこれを行ふは輕忽を以てせざらんやう
に留心すべし。

百五十六、思念は我等を勸めていふやう汝はすべてに於て罪を犯す故に
毎言毎行毎思念よつきていふべし我は罪を犯せりとけだしもし我れ罪を
犯せりといはざるならば是れ即ち己を罪を犯さざりし者と思ふなりと。——
我等は言ふに於ても行ふに於ても思ふに於てもすべて罪を犯すとの篤信を常
に有すべし、されども何れの場合にも我れ罪を犯せりといふとは能はざるな
り、是れ我等を失心と擠さんとする魔鬼等の勸むる所なり、されば我等が毎

行此の如くよいはずんば我等は己を罪を犯さしりし者とするものゝ如く我等は勸むるなり。然れども我等は傳道の書よいふ所を記憶す曰く「言ふよ時あり黙するよ時あり」傳道書三の七。されば朝は(過ぎし)夜の爲め又晩れよは晝の爲めよ我等が祈禱よ於て痛悔と共に主宰たる神よつげていはん。主宰よ汝の聖なる名の爲めよすべてを我れよ赦し給へ、我が靈を愈し給へ、我れ汝よ罪を得ればなりと(聖詠四十の五)されば汝は此れよて足れり、是れ猶誰か常なる債主を有して彼より金を各時よ借らんよ毎々彼れと精確よ決算し得べき有らずして一度よ清還するものよ似たり、此處よ於てもかくの如くするなり。

百五十七、唱詩の時よ當り智識の迷ふある時は如何よすべきか。——もし放心よよりて思ひ錯まるある時は回歸りて前よ置く所の詩の我が記憶よ存する言より始めよ。されども一度二度三度回歸りて汝の誦讀が斷れたる所の言を想起し難きあり或は想起したるも誦讀を續くべき場所の見付け

難きある時は同詩を最初より始めよ。敵の目的は忘るゝをもて頌讀よ妨を爲すよあり。前よ置く所の詩を順序よよりて讀むは頌讀なり。されども此の時よ放心せざるとはたゞ其の清き心情を有する者よのみ能くすべし。さりながら我等は尙薄弱なり。されば我等は己の放心を認むるある時は讀む所を理解せんが爲めよ醒心を回復せん。然らずんば頌讀は我等の爲めよ定罪とならん。

百五十八、さて祈禱中智識の牽かるゝある時はいかよ爲すべきか。——神よ祈禱して智識の牽かるゝある時は放心なくして祈禱するよ至る迄は苦戦すべく又牽かれざらんやうよ汝の智識を醒ますべし。されども此事の長く續く時はたとひ祈禱の終りよ至るとも内よ己を責め感動をもていふべし。曰く主よ我を矜み給へ我れに我が悉くの罪を赦し給へと。さらば汝は悉くの罪よ於て赦をうけ祈禱の時よ生じたる放心よ於ても赦をうけん。

百五十九、兄弟の詩をよむ時我等が思の時として平安よ存するあり又時

として牽かるゝあり我れいかよ爲すべきか。——汝が思の平安よ存して兄弟の誦讀よより感動をうくるを見る時は此の行を固く執るべし。されども汝の智識が他の思よ誘はるゝを見る時は己を責むべく且己れをして兄弟の讚頌よ心を留めしむべし。されどもし智識の重ねて誘はるゝを見る時は重ねてこれよ禁せよ。而して三次よ至る迄はかく爲すべし。さりながら智識が存し止まる(此れよ)時はこれを誦讀より誘引すべし。されどもこれを閑散よ置くなかれ。審判と永苦とを思はしむべく且神の聖なる名よ祈禱していふべし。曰く主イエススハリストスよ我等を矜れみ給へ。

百六十、もし誰か兄弟と共よ唱詩よ立ちて兄弟が讀む所の詩を知らざるあらんよこれを聴くは己れよ益あるか或は己の知る所の者をよむは更よ益あるか。——兄弟が讀む所の詩を知らざる者はこれを聴くよ代へて自ら知る所の者を讀むと更よ益あり。けだし放心は聴くと混すればなり。百六十一、運動は惡念よ對するの(は)あしき思念よ傾かず又これよ同意せ

ずして穩よ神よ趨り就くよあるべし。故よ思念の入るあらば動搖するなかれ。思念の何を爲さんと欲するを調査し穩よ主を呼びてこれよ敵すべし。主はイウデヤの地よ來り、即ち人心よ來りて惡魔を逐はん。故よ彼れよ呼ぶこと門徒の如くなるべし。曰く『主や我等を救ひ給へ我等亡びん』(馬太八の廿五)さらば彼は醒め起きて思念の風よ禁じて風穩ならん。けだし彼れの力と榮とは世々よあればなり。

百六十二、幾何の能力を有するありとも自ら己を何人よりも卑く視んとを強めて日夜己を卑うすべし。是れ眞實の路なり。此の外他の路あるなし。百六十三、もし我れ誰彼となく不適當よ動作するを見る時は我れ其の不適當を批判するを得るか。さらば此れより流るゝ近者を議するの議を如何して逃るべきか。——實よ不適當なる行爲は我儕これを不適當と認めざるを得ず。けだし然らすんばこれより生ずる所の害を我等いかよして避けんや。されどもかゝる行を爲す所の其人を議すべからず。聖書よ『人を議するな

かれ汝議せられざるを致せ』ルカ六の三十七といふに依るも又我等は自ら己を悉くの人より尙罪なる者と認むべきに依るも且兄弟の罪を犯せるを我等は己の犯せるものと思ひて唯其の彼を誘惑したる魔鬼を憎むべきに依るもかくの如し誰か他を抗し擠したらんは我等は其抗し陥りし者を責めずして彼を擠したる者を責む此處に於ても實にかくの如し人の事を爲すや其の見る者の爲には適當ならざるが如くに見ゆるも其爲す者の善意によりて行ふの場合ありさればこれと同じく我等も亦其の罪を犯したる兄弟が既に己の謙遜と信認とより悔改をもて神の喜ぶ所となるを否とを知らざるをありフアリセイ人は己が自譽の爲めに定罪せられて退けり此を知りて我等は税吏の謙遜に法り自ら己を罪せん義とせられんが爲なり又フアリセイの自譽を避けん定罪せられし者とならざらんが爲めなり百六十四 他人と共にするに愧耻の爲めに心亂れ我が談の愚にして言語に交ゆるに意味なき笑を以てするの時ありいかますべきか——それ神を

畏るゝの畏れはすべて心の擾れとすべての不順序と混雜とを避くべし故に我等は談話に先だちまづ己を神を畏るゝの畏れに固めて我等何故擾亂するか且嗤笑するか子細に己の心は於て穿鑿せんけだし神を畏るゝの畏れは嗤笑あるなければなり聖書に愚者の事を謂ふ彼等は笑ふ於て其聲を擧ぐ』シラフ廿一の廿三と且愚者の言は擾亂して恩寵を奪はるされども義人のとはいふあり彼の笑は『僅に微笑に止まる』と故にもし我等は己に神を念ふの記憶を起し又我が兄弟と談話するに謙遜と沈着なる思念とを以てすべしとの念を起し且此を回想して神の畏るべき審判を常に目前に有するある時はかくの如き心掛はもろくの悪しき念慮を我が心より追はんけだし沈黙溫柔及び謙遜のある處に神は住り給へばなり神の聖なる名を呼ぶとの我等に必要なるをまづ第一に想起せんけだし神のある處にすべて善なる者のあるは魔鬼のある所はすべて悪なる者のあると同じく明々白々なればなり

百六十五、自由の交際も二種あり、一は無耻より生ずるものとして萬惡の根本なり、又一は快樂より生ずるものなり、然れども此の後者もこれを數する者の爲めも全く有益なるものはあらず、さりながらたゞ其の堅固にして有力なる者は兩つながらこれを避くるを得れども我等は己の荏弱の爲め此を避くる能はざるより其の兄弟も誘を致すの緣由を與へざらんやうに注意して快樂より生ずる所の自由の交際を時あり少なくも許容するとあり、されども戲笑に至てはこれに自由を許すべからず、其の戲笑を禮讓をもて過さんが爲めも思念を制すべし、けだし自から戲笑も自由を與ふる所の者は此れよりして淫蕩も陥るを知るべし。

百六十六、諷諷を欲するよりて人は高慢するに至る、されども高慢が乗ずる時は驕傲を生ず。

百六十七、神の機密の事は或は探問するを要するか、又罪人は機密も就き不當なる者として定罪せらるるか。——ハリネストスの体と血とをうけんが

爲めも聖堂も來りてこれをうくるあらば此の機密の眞理も疑なく信を置くやうに己れも注意すべし、されども此の機密の如何を好んで探問するなかれ、此れ我が体なり此れ我が血なり』といはれし如く其まゝ信すべし、主は罪を赦すが爲めもこれを我等も與へ給へり、馬太廿六の廿六、馬可十四の廿二、かくの如く信する者は罪せられざるも信せざる者は最早罰せらる、我等はこれを信用す、故も罪人の如く己れを定罪しつゝ就くを自ら禁するなかれ、救世主も就く所の罪人は罪の赦しを賜はるを承認すべし、それ我等は聖書に於て信仰をもて救世主もつき其の神なる聲をきしし者を見るなり、曰く、汝の多くの罪は汝も赦さる、馬太九の二、五、馬可二の五、ルカ七の四十七、四十八、故も汝は己を罪人と承認し亡びし者を救はんを能くし給ふ者も就くべし、馬太十八の十一、ルカ十九の十。

百六十八、我れも多くの不潔なる思念の生ずるあらん、我れこれ誰もでも言ふを自ら耻づる時はいかゞ行爲すべきか。——これを神もつけて左

の如くいふべし、曰く主宰よ我れ識ると識らざるとより汝の旨よ戻る事を思念したるを我れよ赦し給へ、けだし汝の矜恤は世々よあればなり、アミン。

百六十九、我れ淫慾よ苦む、我れ如何は爲すべきか。——出来るだけ自から己を疲らすべし、然れども又己の力を量るべし、さりながら此よ自ら依頼するなく神の愛と庇蔭とよ依頼すべし、又失心よ沈むなかれ、けだし失心は萬惡の始めとなればなり。

百七十、嗜甘、貪財、貪獲及ひ其他の欲の戦は我を擾す、我れ如何よ爲すべきか。——嗜甘の欲の戦ふ時は力を盡し神の爲めよ苦戦して身体よ其の要求するだけを與ふるなかるべし、貪財、又貪獲よ關しても亦同様よ行ふべし、戦の汝を擾すある間は襦袢又は土器よ至る迄も餘分のものは一も斷じて得るなかれ、且最小なる物よ於て、苦戦すべし、貪獲よ向つて、さて神の助けよよ此戦よ勝つ時は汝よ要用なるものを神よ依て獲よ、他の諸欲よつきても

亦かくの如く、即ち實驗的反對をもて行ふべし。

百七十一、たやすく發怒する所の兄弟よつげん、もし汝はすべての人の爲めよ自ら死し多少の謙遜を有せんとを自ら強^{ツミ}むるあらば平安を有するを得べく多くの災難を免れん、汝の心は神の前よ謙るべし、さらば神の恩寵はすべてよ於て我等を保護せん。

百七十二、もし汝は病弱の爲め、唱詩と祈禱とを坐して行ふも感動と共よ行ふ時はこれ汝の奉事の神意よ適ふを妨げざるなり、けだし誰か立ちてこれを行ふも放心を以てするならば其の勞は無よ歸せん。

百七十三、汝ち或は立つか或は坐するか或は寐ぬるか汝の心を汝の唱詩の勤めよ於て儆醒せしむべし、日夜間斷なく神よ趨り着きて祈禱よ己を委ぬべし、然る時は靈魂を打^{うつ}贏^{つか}す所の敵は耻を蒙りて退かん。

百七十四、我が神を希望するの徴候は如何なるか、又罪の赦さるゝの徴候は如何なるか。——神を希望するの徴候は肉躰の爲めよ配慮するすべての

念を己れより抛擲して此世より何物をか有せんを断じて思はざるよりあり、けだし然らずんば汝はこれより望を有して神より有するにあらざるなり。又罪を赦さるゝの徴候は罪を憎んで復び行はざるよりあり。されども人、罪事を思ふで其心よりこれを樂み或はこれを實際より行ふある時は是れ即ち罪は其人よりいまだ赦されずして猶罪人と認めらるべきの徴候なり。

百七十五、定理の書を読むべきか。——汝が此等の書を研究せんとは我は願はざらん、何となれば此等の書は智識を上より擧ぐればなり、寧ろ智識を下より遷らしむる諸老人の言を學ぶべし。我が此くいふは定理の書を卑むが爲めよあらず、たゞ汝より勸諭するのみ、けだし食物は種々あればなり。

百七十六、聖書よりいふ君長たるもの汝より向ひて發怒するも汝の本所を離るゝなかれ。『傳道書十の四』是れ何を意味するか。——是れ即ち思念をして汝より向ひて發怒せしむるなかれ、これと談話するなかれ、乃ち神より依頼せよとなり、けだし彼れより思念より答ふるあらんと欲する時は彼の事を回想するより

引入れられて彼は汝を祈禱の熱心より離れしむべければなり。

百七十七、誰彼より論なく我を惡しくいふあるを聽く時は我れ如何より爲すべきか。——直ちより祈禱より起ちて先づ其者の爲より祈るべく次で己の爲より祈りていふべし、曰く主イエスキリストスや此の兄弟と汝が無用の僕たる我を矜み汝が諸聖人の祈禱をもて我等をあしきより庇ひ給へ、あみん。

百七十八、誰か他を惡言し始むるあらんより氣付く時は速より談話をやめ或はこれを他の更より有益なる談話より易へんを要す、尙此事より於て遷延するなかるべし、多言より再び惡言より陥らざらんが爲なり。

百七十九、惡言を樂んできくはこれ亦同く惡言として彼と同様の定罪をうけん。

百八十、無力の爲めより生ずる天性自然の失心あり又魔鬼より來るの失心あり、もし汝はこれを辨別せんと欲せば左の如く辨別すべし、魔鬼より屬するものは其の己れより休息を與ふるを要するの時より先だちて來らん、けだし人

何までも爲し始むるある時は事の三四分の一成らんとする。先だち彼は人をして事をすてゝ起たしむるなり。其時は彼れも聽従すべからず乃ち祈禱を行ひ忍耐して事も勉勵すべし。さらば敵は人の此事の爲め祈禱を行ふを見て彼と戦ふをやめん。けだし敵は祈禱も端緒を與ふるを欲せざればなり。

百八十一、〔長老は〕兄弟よつげて左の如く言ふべし。願くは誰も思念を隠さざらんをけだしもし誰か思念を隠すあらば惡鬼は喜で彼の靈を滅す。盡力せん。然るも兄弟の中誰か汝も自己の思念をつぐるある時は心中も呼んで左の如くいふべし。『主よ兄弟の靈魂の救の爲め爾の意も隨て我れを救へ給へ我れ彼れもいふを得んが爲めなり又汝の言をいひて我が言をいはざらんが爲なり』。

百八十二、己を長老は悉くの人より卑く思ふべし。されどもこれと同しく汝は悉くの人の治者よして汝がうくる所の位の爲め答責を與へざるべ

からざる者と思ふべし。』

百八十三、もし我れ誰なりとも何事をか爲すを見て其を他の人よ話説せんと余れ彼を議する。よあらず我等互に談話するのみといふならば此の時我の思ふ誹謗あるなきか。——人は此をいひつゝ此時は欲の動きを感ずる。あらばこれ最早誹謗なり。されども彼れもし欲より免るゝあらばこれ惡言よあらずして惡を成長せしめざるが爲め言ふなり。

百八十四、誰か自由よして己れも罪と惡とを有するか又誰か自由ならずして有するか。——自由よして己れも罪と惡とを有するとは己の自由を惡よ委ねこれをもて樂みこれと親む者是なり。かくの如き者は「サタナ」と親睦し思ふ。於てこれと戰を作さるなり。されども自由ならずして己れも惡を有する者とは使徒の言よ依る。『ローマ七の廿三』其の肢体よ於て抵敵する反對の力あるを覺ゆるあり。且或る黑暗の力の己れを覆ふおれどもたゞ思念中よあるのみよして思念がこれと合同せずこれを樂まずこれよ從

はず却りて反論抵抗、逆言、抵敵して自から己を怒る所の者は是れなり。
 百八十五、体は一なれども肢は多し、されども一肢を欠くあらば体は完全の体、あらざるが如く多くの徳行をもて其肢とする内部の人の事も亦同く然るを知るべし、もし其中一つを不足するあれば人は最早完全の人、あらざるなり、されば己の本職を善く知り又其の才智の敏捷なるは依りて他の諸の職業をも學ぶ所の職工は其の諸の職業の師とは名づけられずしてたゞ其の本職の師と名づけらるゝが如く此處に於てもかくの如くなるべし、すべての徳行を有する所の人はそれより依りて認識せられそれよりて名稱をうけて聖神の恩寵はそれよりて大に其人を照らすなり。
 百八十六、聖物をいやしめ或は聖なる信仰を非る者あるを見る時は熱心の故に彼に對して心の擾るゝあり、是れ宜きや否や。——匡正(惡)は惡なる者より成らずして善なるものよりて成らんとは汝の既聞く所なり、故にかく舉動する者を神を畏るゝの畏れをもて教誨し溫柔と寛忍とをも

ていふべし、されども自から心の擾るゝを見るあらば何もいふべからず。
 百八十七、我れ如何すべきか我は易しく欲を誘はるゝ欲と同盟を爲すなかれ、汝の目を反して虚きを見るなかれ、聖詠百十八の三十七、汝の手を貪利よりどいめよ、さらば神は汝を欲より救ひ給はん、禮讓をもて己を行ふべく食と飲とを飽くまで味ふなかれ、さらば欲は汝に鎮まりて汝は安きを得ん、百八十八、思念は我れに畏れを抱かしめていふやう汝たとひ欲せずといへども魔鬼は汝をして罪を犯さしめ其を遂げしむるを得べしと、我れ此が爲め甚だ悲む、——それ魔鬼は誰なりとも權を有するやうと思ふなかれ、罪の原因は我等自由の意旨にありて夫の權を我等の上よりうけしが如く見ゆる者より強むらるゝよよるは非ず、人は救は強むられざるが如く罪も強むられざるなり、魔鬼のエツを誘ひしは己の權を以てしたるか將た勸誘を以てしたるか、何處にも彼の權は見得ざるなり、もし然らずして彼は權を有せしならんは誰も逃るゝと(罪を)あたはざらん、我等は恰も夫の隨意

己を他の僕従たらしめたるも時々己れも反りて自ら悔ゆる所の自由の人よ似たり然れども此の時もし彼れ敵よりも更よ大よ力ある者よ援を乞ふわらざる時は己を救ふ能はざるべし、されども援を乞ふ時は彼れ彼の想像的主人は其の自分の僕よわらざるを知りて全能者の爲めよ敢て汝も何も爲し得ざるべし、故よ魔鬼が人よ對して權を有せざるとは明白なり、されば汝も己の思念よつげて左の如くいふべし、我は實よ負債者なり、然れども我は既よ我を救ふを能くする者よ援を乞へり、彼は我を呼びて『凡そ勞苦して重きを負ふ者は我れよ來れ我れ汝等よ安きを賜はん』馬太十一の廿八といふ、故よ我は再び敵の手よ陥らざらんが爲めよ常よ儆醒すべしと。

百八十九、汝は聖なる諸父の行狀の事及び其の諸の説明の事を談する時は己を罪していふべし曰く我は禍なりいかにして我れ諸父の徳行を言ふも自らは一もその如くなるを得ざるか、いかにして少しくも上進せざるか、いかにして使徒の所謂他人を救へて己を救へざるか『ローマ二の廿二』と

いへる言は我の上よ成らざるべきかど、己れよ於てかくの如く言ふある時は汝の心は感動せん、さらば汝の言は謙遜なるべし。

百九十、人と談論する時よわたりて神の名を呼ぶは宜きや否や。——談論の時よ於ても談論の先きよも又談論の後よもすべての時すべての處よ於て神の名を呼ぶべし、聖書にいふ『斷えず祈禱せよ』ソルン前五の十八けだし此れよよりてすべての誘惑は空うせらるればなり。

百九十一、いかにして人は間斷なく祈禱するを得べきか。——誰か獨り居る時は唱詩よ練習すべく口と心とにて祈禱すべし、されども誰か市場よあり又は總て他人と共よする時よは口よて祈禱すべからずされども一の智識を以てすべし、此の時は思の散亂と敵の網とを避くるが爲めよ目を守らんを要す。

百九十二、我れ祈禱し或は唱詩よ練習するわらんよ心の無感覺の爲めよ誦する所の言の旨趣を感せざる時は此れ祈願よよりて我れよ何の益ある

か。——たゞひ汝は感せず誦する所の言の能力をといへども魔鬼はこれを
 感じ聽て戰栗するなり。故に唱詩と祈禱とを練習するをやむるなかれ。さら
 ば漸々神の助けによりて汝の無感覺は變じて溫柔とならん。

百九十三、晚餐を坐する者皆俗人として祝福する〔晚餐〕を得べき者のあ
 らざる時は我等いかゞ爲すべきか。——食を就くを神を祝するは俗人によ
 も宜きなり。けだし神を記憶するより食は聖とせらるればなり。されども
 此の祝福は聖役者の祝福と同様の價值を有するは非ずしてたゞ神を讚
 美し且記憶するのみなり。けだし神を記憶すると神を讚美するとは衆人よ
 適當なり。故に彼等の中食物を祝福し得べき者のあらざる時は俗人によ
 これを爲さんと宜きなり。

百九十四、主はいへり泣く者は福なり〔馬太五の四〕とされども使徒の言に
 依れば常に喜ぶべく〔ソルン前五の十七〕衆人の爲め寛和ならんを要す〔ロ
 一マ十二の十〕我れよつげよ泣くよりて人よ如何なる事の歸するあるか

又常に喜ぶよりて如何なる事の歸するあるか且や此の二者即ち泣くと
 喜ぶとは並び存するを得るか。——それ泣くとは神に依るの哀みとして悔
 改によりて生ずるなり。されば悔改の徵候は禁食、唱詩、祈禱及び神の言を學
 ぶと是なり。喜ぶとは又神に依るの喜樂として他人と接する時、面貌も
 言語も相應し露はるゝもの是なり。心は泣くを守るべく面貌と言語とは
 相應の喜樂を守るべし。

百九十五、もし誰か奉事の時、當り聖堂に入らん其の終る先だちて
 これより出づるあらば是れ罪にあらざるか。——完全なる且神に悦ばるゝ
 の行は聖堂に入りし者聖書をさし其の全く終るに至るまで奉事を止まる
 るあり。けだし重要な理由なくんば奉事の終る先だちて聖堂より出づべ
 からず。何となればこれ侮辱なればなり。されどももし已むを得ざる事の目
 前、臨み來るあらばこれをゆるさるゝなり。されどもかゝる場合、於ても
 人は己を義とすべからず。神に赦を願ふべし。曰く主宰よ我れ當然を果す能

はざるより我れを救し給へ。……
 百九十六、聖堂に於て談話するを得べきか。——何人たりとも聖なる「ソールギヤ」の時、當り神の家、於て斷じて談話すべからず、祈禱、練習すべく我が靈魂の救、資くる所のものを報する神の書を念を入れてきくべし。されどももし何かいふべき必要のある時は現時に於けるの虔恭と畏懼とより簡短に言ふべし。且此事は己を罪するより外ならずと思ふべし。
 百九十七、思念は我れ、吾が一家と共に養はるゝ能はざるを示して我れに要用なる方法の缺乏するをあらはす、これが爲め、哀憂は我を襲ふ、是れ何を示すか。——是れ人間の哀憂なり。もし我等神に望を有するあらば神は自から其の旨に依りて我等を治めん、故に汝の哀みを主に負はしめよ。「聖詠十四の廿三」さらば彼は汝と汝の一家に哀みと憂となくして、すべて要用なるものを與ふるを能くするなり。神に近づいていふべし、願くは汝の旨はならんと、さらば彼は汝を哀みと憂と棄てざらん。

百九十八、主日、何か爲すゐるは罪にあらざるか。——神の榮の爲め、何か爲すゐるは罪にあらざり、けだし使徒はいへらく「日夜操作して人を累さるを致すべし」。「ソルン前二の九」されども神の爲め、あらざり、主日を輕忽として貪利と卑陋なる欲心の故、何か作すゐるは是れ罪なり。されど主日と主の祭日と又聖使徒の記憶日、事を廢して聖堂に來るは總て益ありとす、けだし聖なる使徒の傳は此を教ふ。
 百九十九、我が家畜の病にかゝるあらん、誰かを招きて咒文を唱へしむるは愚にあらざるか。——それ咒文を唱ふるは神の禁する所なり、故にいかなる場合、於てもこれを爲すべからず、けだし神の命令を破るは靈魂の滅亡なればなり、寧ろ他の方法をもて其の畜を療すべく醫に頼りて相談すべし。此事に於ては罪なし、或は聖水をもてこれよそいぐべし。
 二百、神は人を自由なる者、造れり、されども神は亦自らいへらく「我れなくしては何も行ふ能はず」。「イオアン十五の五」自由と神なくして何も行ふ能

はざるをばいか調和し得べきか。——それ神が人を自由なる者よ造り給ひしは人の善よ傾くを得べからんが爲めなり。されども人は己の望みをもて善よ傾きつゝあるも神の助けなくんば善を成すの力あらざるなり。けだし録していへる有り』欲するよよるよわらず趨るよよるよ非ず憐むの神よよる』ローマ九の十六。故よ人が己の心を善なる者よ傾けて神の助を呼ぶある時は神は其人の善良なる熱心よ注意して人よこれを爲すの力を與へん。かくの如くならば彼れと此れと、即ち人の自由よも神より人よ賜はるゝ助けよも各其所あるなり。けだし善なるものは神より流るれど亦神の聖者よよりて行はるればなり。故よ神は衆人よ於て讃揚せられて亦衆人を表揚するなり。

二百一、「エムマヌイル」とはこれを譯けば「神は我等と共よす」の義なり。ゆゑよ神は眞實我等と共よするありや否を己れよ試むべし。もし我等惡より離れ惡の創成者たる魔鬼より遠ざかりたらんよは神は實よ我等と共よせん。

又惡行の甘きは我等よ苦くして我等は善行の望みと常よ天上よ第宅を有せんとの望みとをもて樂むあらば神は實よ我等と共よせん。もし我等は衆人を一様よ視て諸日憂愁の日も安樂の日もは我等の爲よひとしからんよは神は實よ我等と共にせん。もし我等は吾人を憎み且辱かしめ且責め且輕んじ毀損を蒙らしめ及ひ窘逐する所の者と又我等を愛し且賞賛し我等よ獲るあらしめ且は我等を安んせしむる所の者とを同く愛するならば神は實よ我等と共よせん。されども此の程度よ達したるの徴候はかくの如きの人常よ自ら神を有するよあり。蓋し神も常よ彼れと共よすればなり。されどももし神の彼れと共よするなく彼も自から神を有せざらんよは必ず反對なる者を己れと共よせしめざるべからざらん。智識を有する者の爲めよは其他も推して知らるべし。

祈禱惶々集畢

明治廿九年十二月廿五日印刷
明治廿九年十二月廿八日發行

翻譯兼發行者

堀江復

東京市本郷區森川町壹番地

印刷者

岡本文治

東京市麴町區麴町十丁目
四番地

印刷所

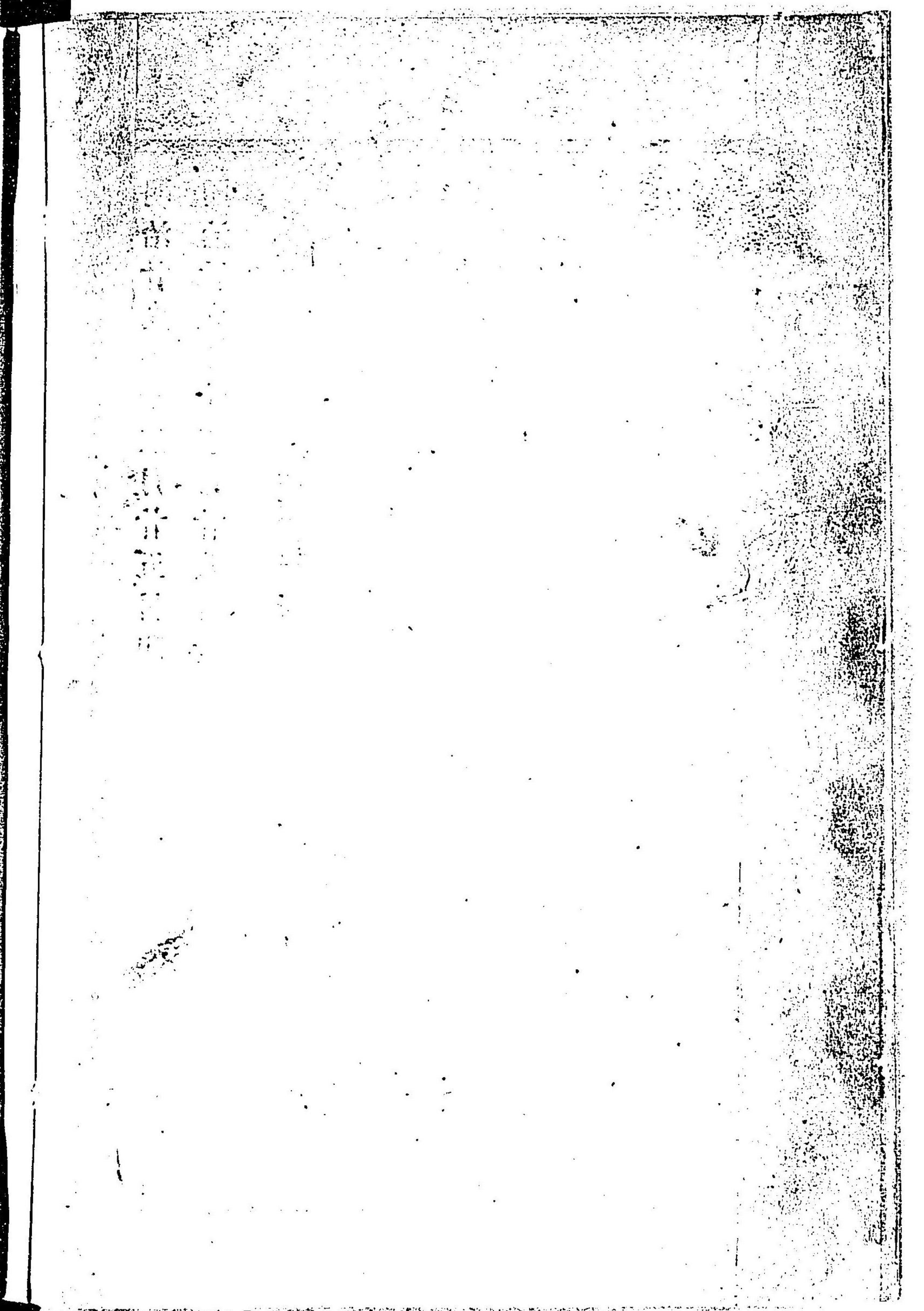
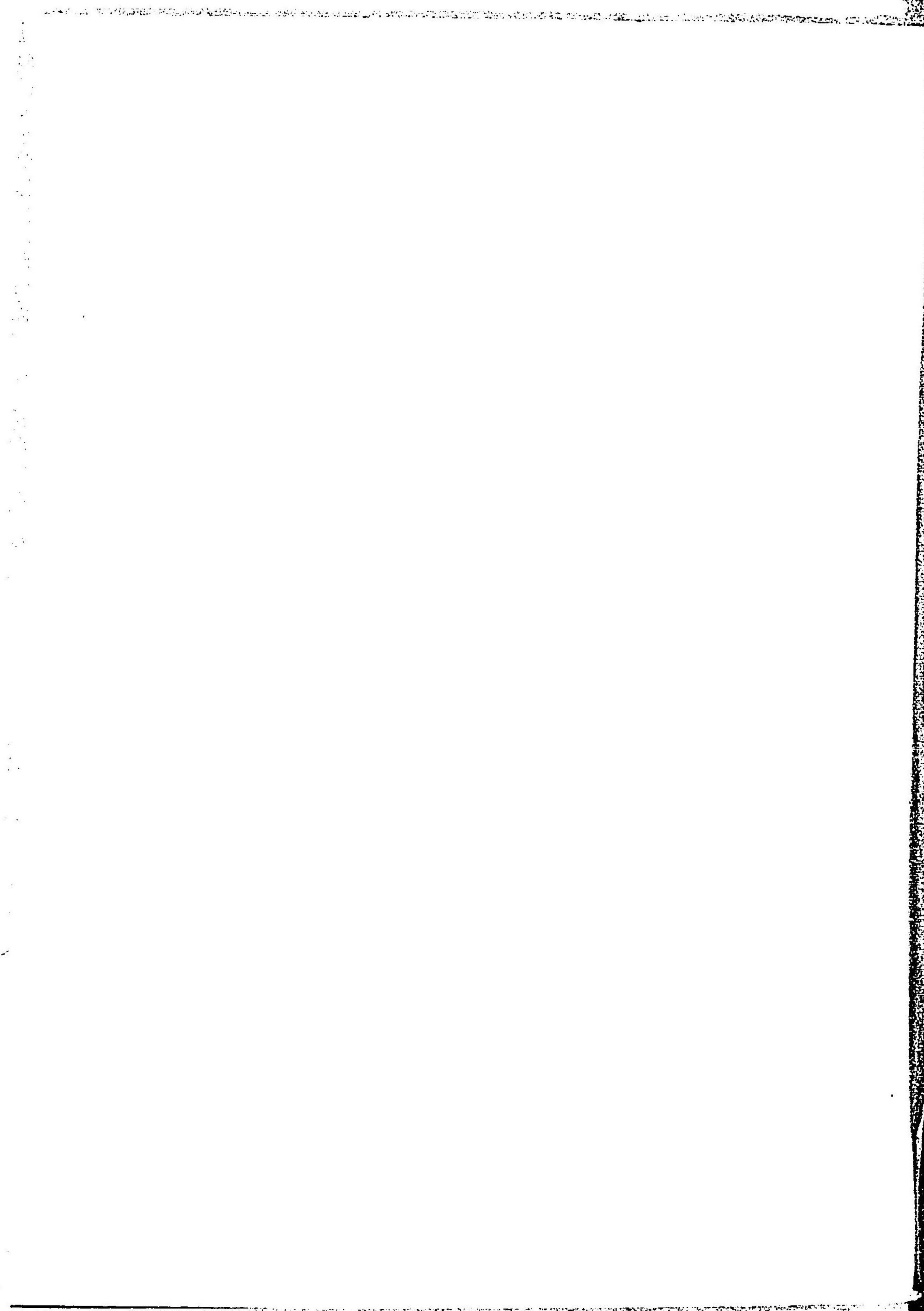
岡本活版所

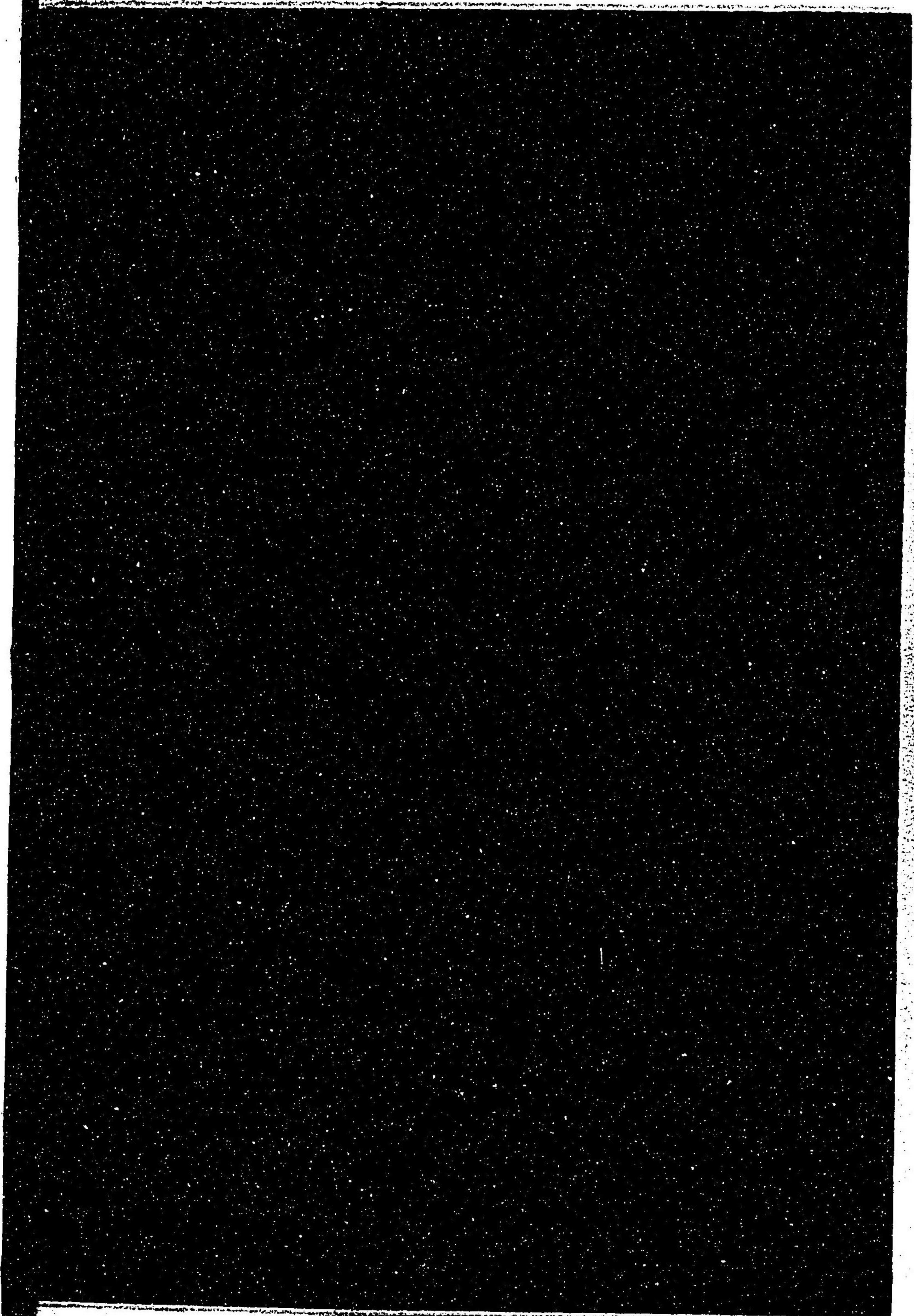
東京市麴町區麴町十丁目
四番地

發行所

正教會編輯局

東京市神田區駿河臺
北甲賀町十三番地





特21

180

祈禱惺々集

国立国会図書館

020364-000-8

特21-180

祈禱惺々集

斐沃芳(フェオファン)/著

M29

ABI-0171

